

令和6年度 第2回横須賀市学力向上推進委員会 議事録

- 1 日時 令和6年10月30日(水) 15時00分から16時30分まで
- 2 場所 横須賀市役所 301会議室
- 3 出席委員
笠原委員・石井委員・塚田委員・新田委員・庭田委員・高橋委員・村上委員・小日向委員
- 4 事務局
学校教育課教育指導課 鈴木課長 石橋主査指導主事 渡辺主査指導主事
東指導主事 北井指導主事
- 5 傍聴者 なし
- 6 会議内容

(1) 事務局からの報告

事務局から次のとおり、学力向上推進プランに掲げた目標の実現に向けたこれまでの取組による成果と、全国学力・学習状況調査(小6・中3)の教科に関する調査結果と質問調査結果についてクロス集計を行った分析結果を説明し、質疑応答を行った。

■事務局

学力向上推進プランは令和4年から4年計画で進めており、現在3年目にあたる。このプランで掲げた目標の実現に向けて、この学力向上推進委員会で様々な提言や答申をいただいていた。特に、学力向上のためには教員の授業力の向上が不可欠であることから、授業改善に資する取組の強化をしていくことが必要であると委員の皆様から意見をいただいていた。また、コロナ禍により、教員の授業を観る機会が減ってしまい、若い教員は模範となるような良い授業を観たことがないということが課題となっているという意見もいただいていた。

そこで、教育指導課で委嘱する教科等指導員の人数を増やし、年1回の授業公開を行っていただくことをお願いした。また、様々な機会を捉えて教員には、教科等指導員の公開授業に参加するように周知してきた。資料1にあるように教

科等指導員の公開授業の参加者は年々増えてきている。これは、より良い授業をつくりたい、授業を改善したいという教員の意識の高まりであると捉えることができる。

また、昨年度は学力向上推進プランで掲げた目標に対する数値が上昇している学校の取組を事例として載せた報告書を作成し、市内の学校に送付している。また、この報告書では授業改善に必要な視点を示し、学力向上担当者会でもそれらを紹介し、市内の全学校で授業改善を意識していただくようお願いしてきた。これらの成果がみられ、授業改善に対する教員の意識は、確実に高まってきていると感じている。

続いて、具体的な数値の変容について報告する。学力向上推進プランでは同一集団の経年変化を目標指標としているが、学力向上推進プラン実施3年目となり、この3年間の数値を同じ学年で並べてみると、それぞれの項目において上昇していることが分かってきた。その上昇値については資料1にある通りである。特長としては、小学校よりも中学校のほうが上昇の幅が大きいことである。また、長年課題であった国語の記述問題の無解答率についても減少しており、記述問題の正答率も上がってきている。中学校3年生の全国学力・学習状況調査の平均正答率も年々上昇し、全国平均に近づいてきている。

これら以外にも、授業改善が進んでいることが分かるデータもあった。資料1にあるように、全国学力・学習状況調査の質問紙調査において「学級の友だちと話し合う活動を通して、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか」という質問があるが、小学校・中学校ともに、その肯定回答の割合は令和元年から令和6年まで、毎年上昇している。

このように、様々なデータから市内の学校では学力向上につながる授業改善が進んでいることが成果であると捉えている。

続いて、全国学力・学習状況調査の教科に関する調査の正答率と質問調査の結果をクロス集計した分析結果について報告する。

特に学力向上推進プランで掲げた目標に関連した項目とICTの活用状況を中心に分析した。

資料2の1ページから6ページにあるように、小学校・中学校ともに、どの教科においても主体的・対話的に授業に臨んでいると実感している子どものほうが、正答率が高い傾向にあることが分かってきた。

また、8ページからのデータにあるように主体的・対話的に授業に取り組んでいる子どもは家庭の経済状況に関わらず、正答率が高くなる傾向があることが分かってきた。これらのことから、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた

授業改善が学力向上のためには不可欠であることが言える。

自己肯定感に関する質問についても、「先生が自分のよいところを認めてくれる」と回答している児童生徒は「自分にはよいところがある」と回答している割合が高く、それらの児童生徒の正答率も高くなっている。

粘り強さに関しても、主体的・対話的に授業に臨んでいると実感している児童生徒のほうが、無解答率が低くなる傾向が分かってきた。いっぽうで13ページからのデータにあるように、無解答だった児童生徒は時間がなくて無解答だったのか、問題が分からないからあきらめて無解答だったのかということについてクロス集計をしたところ、小学生は最後まであきらめず調査問題に取り組んでいる傾向にあるが、中学生は無解答なのに調査時間があまったと回答しているような、途中であきらめてしまう生徒が一定数いることが分かってきた。そういった生徒に対して、授業の中で日常的に教師が声をかけ、粘り強く取り組めるよう働きかけていく必要がある。

最後にICTに係る質問と教科調査の正答率をクロス集計した結果を報告する。昨年度までは、ICTを活用していると実感している児童生徒のほうが、正答率が高い傾向にあったが、今年度は小学校、中学校とも、週1回以上ICT機器を活用している児童生徒の方が、平均正答率が高い傾向が見られた。これからは活用の頻度ではなく、効果的な活用方法の検討や、ICTを活用した個に応じた指導の充実を図る必要がある。

■委員長

ただいまの報告について、事務局へ質問や確認はあるか。特に無いようであれば協議に移る。報告にあった資料の内容についてふれながら、協議をしていただきたい。

事務局より協議題や資料について説明をお願いしたい。

(2) 協議

事務局が、横須賀市学習状況調査の正答率度数分布一覧と正答率の人数の割合が特徴的な学校の度数分布図を学校名は挙げずにいくつか示し、正答率40%未満の児童生徒が一定数いる中で、学力層全体の引き上げを図るために、学校が組織的、継続的に取り組むべきことについて協議を行った。

■事務局

資料4の横須賀市学習状況調査における正答率度数分布一覧をご覧ください

たい。小学校5年生と中学校2年生の結果である。市全体の結果とともに、抽出した学校の度数分布も載せてある。これらは、同規模の学校でありながら、正答率の伸び方に違いがあり、学校研究の取組等に違いがある学校を選んでいる。協議題については、学力向上推進プランの目標3「学力層全体の引き上げを図る」の中で正答率40%未満の児童生徒の減少を掲げているため、それらを減少させていく方策について議論していただきたいからである。また、協議題を考える中で、日常の授業が正答率40%未満の児童生徒を意識した授業になっているのかということが事務局内でも話題になった。正答率40%未満の児童生徒が授業の中で主役になり、学ぶことが楽しいと思えるような授業ができないものかと考えている。また、そのような授業ができていない教員も多くいると思うが、それが個人的なもので、組織的な取組となっていない場合が考えられる。担任や教科が変わることで、正答率40%未満の児童生徒が授業の中で取り残されたりするのは、各校の組織的で継続した学力向上の取組にはつながらない。学校全体が正答率40%未満の児童生徒を支えられる授業をつくる組織となっていかなければならないと考える。

資料3については、全国学力・学習状況調査の学校質問紙のデータである。学校質問紙は学校の職員が回答する。その質問の中に「児童の姿や地域の現状等に関する調査や各種データなどに基づき、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルを確立していますか」という質問がある。令和6年度の結果は「よくしている」と回答した小学校の全国平均は40%であるのに対して、横須賀市の小学校はわずか8%であった。この質問について、中学校は全国平均とあまり差はなかった。小学校は、過去にさかのぼり同じ質問のデータを確認したが、毎年「よくしている」と回答している学校の割合はかなり低い結果だった。

この結果について、さらに調べると令和4年度から令和6年度まで、毎年「よくしている」と回答している学校が市内で1校あった。その学校の学校長に話を伺うと、赴任した時には、学校研究や学力向上などの各担当が連携せず、単独で仕事をしているような状況だったそうである。それを、学校教育目標を実現するために、全て学校業務に係る担当者が連携し、お互いの業務をつなげる意識をもつことを職員と確認し、2月から3月は、それらを見直し次年度の計画を立案するような時期として様々な会議を設定しているという話を伺った。

このように本市では、学校が PDCA サイクル意識して、組織的な取組を行っていくことに課題があり、正答率 40%未満の児童生徒の学力についても個人ではなく学校全体で学力を伸ばしていくような取組を組織的に行えないものかと考え、この協議題を設定した。

■委員長

当初、事務局の分析は教科に関する調査の正答率ばかりに目を向けていた。しかし、学校の組織的な PDCA サイクル等にも目を向けるようにアドバイスしたところ、このような課題が明確になってきた。

横須賀市が目指す学力は、いわゆる教科の正答率だけを指しているのではなく、学びに向かう力や自己肯定感なども含めて、子どもの学ぶ姿全てである。また、教員はどうしても授業をすると、ある一定の層を意識して授業を作りがちである。さらに、小学校では学級中心になりがちで、学級の中で授業が完結してしまうことが多い。中学校は学年団である程度まとまりができ、さらには進路実現というゴールこに全員で向かうという道筋もできやすい。

これらのような背景があり、今回の協議題が設定されている。ただ単に正答率 40%未満の児童生徒の正答率をあげるために何ができるかという協議ではなく、今回の協議題を設定させてもらっている。市全体を視野に入れた協議をお願いしたい。

先日、神奈川県のカリエイティブスクールに通う高校生と話をする機会があった。その高校生にカリエイティブスクールに入って何が良かったか尋ねると「学び直しができるところが良い。」とはっきりと答えていた。また、中学校で苦しかったことは何かと尋ねると「勉強ができる子とできない子の差が激しくて、自分はできない子だったからつらかった。」と答えていた。さらに聞くと「この学校の先生はフレンドリーで、自分たちに目を向けてくれているのが分かるし、すごく安心感がある。」と言っていた。その時に思ったのは、一番強く、何とかしたいと思っているのは子どもたち自身だということだ。子どもたちが何とかしたいと手を伸ばしているのに、先生たちがその子どもたちに具体的にアプローチしていなかったり、そこに目を向けていなかったり、声をかけていなかったりする状況があるのではないか。

正答率 40%未満の児童生徒がいることは分かっているけれども、学校全体として、その子たちをどうしていくかという議論がどこまで行われているだろうか。一人一人の先生方に委ねられてしまっていないだろうか。ある先生は意識しているけれど、ある先生は全く意識していないという不揃いな状況は生まれていないだろうか。そういうことが重なって、結果的に子どもたちは何とかしたいと思っているのに、目をかけてもらっていない、置き去りにされている、というような思いになり、苦しんでいるのではないだろうか。

協議題の背景には、今話したような内容があるということを確認させていただいた。では、そのような子どもたちに対して学校が組織的・継続的に取り組むためには、どうしたらよいかということをお各委員の立場から学校の実態などを踏まえて、様々なご意見をいただきたい。

■石井委員

先日、PTA代表として本市の教育フォーラムに参加した。テーマは不登校であった。その中で子どもが求める魅力ある教室について大学生や一般参加者とディスカッションする機会があった。その話し合いでは、一番の魅力は友達との人間関係ということだった。友達に会いたいから学校へ行くという魅力である。実際に過去に不登校になった生徒からも、学校には居場所が無かった、相談する人がいなかったという発言があった。

他には、保護者からは、先生たちが忙しすぎて、ゆっくり児童生徒と話せる時間がないのではないかという意見があった。先生たちが、しっかりと子どもたちと向き合う時間を作るということについては、保護者もできることがあると思う。「子ども」を主語にして、今行っている活動を見直し、本来、保護者がやるべきことを学校や先生方をお願いしているようなことがあるのであれば改善していかねばならない。

また、今年度はPTA協議会として家庭教育について、様々な事業を行っている。例えば「食育」の事業では、食卓で子どもとコミュニケーションをとることの重要性を確認したり、「読書」の事業では、家の中で一緒に本を読みながら感想を伝え合うことをすすめたりしている。

PTA協議会としてはそういう形で動いている。先日のフォーラムに参加し

て、私たち保護者ができるところが何かということを考えさせられ、今はそのような思いで行動しているところである。

■委員長

確かに不登校の原因に人間関係の部分もあるのだろう。しかし、学校の中で一番多くの時間を費やすのは授業であって、その授業の中で居場所がなければなかなか学校に行きたいとは思えないだろう。そして、子どもはただ教室にいただけではなくて、少しでもがんばりたいと思っているのだから教員がその気持ちにどういうふうにコミットしていくかが大事なのであろう。

■庭田委員

資料2の13ページの回答時間のデータについて感想をもった。小学校6年生の国語について18.3%の児童が、時間が余ったが無解答ということである。それらの子はテストを受けている時に分からないまま、時間が過ぎるのを待つという苦しい時間を過ごしているということである。この18.3%の児童の中には、おそらく日々の授業でも、難しい言葉が行き交って、自分の考えも言えない時間を過ごしているのかもしれない。授業に参加する気も無くなっているかもしれない。そういった子たちの正答率を高めるというよりは、その子たちが学校で達成感を感じたり、自分の意見が言えたりする場をとにかく作ってあげることが大切なのではないか。そのように少しずつ達成感や自信をつける中で、日々の努力がテストなどの目に見えて数値化されたものに跳ね返ってくれば、それがまた自信につながり、日々の学校での取組が改善されていくという循環が生まれるであろう。そのためには、やはり子どもたちが自分の言動を自覚できるように、担任や授業をする教員がきちんとその子を価値づけすることが大切である。また、「あなたのここがいい。」「あなたは学習のめあてを達成したね。」「あなたは大切な所に目をつけられているよ。」というように教師が子どもの言動を価値づけられるのは、きちんとその授業の目的やねらい、評価規準がわかっているからこそである。そう考えると、やはり教師の授業力が大切だということに行きつく。

では、授業力向上のために学校組織で行えることとしては校内での研修や情

報共有が欠かせないことだと考えるのだが、情報共有については、小学校は中学校と違い、年度ごとに担任が入れ替わることのほうが多いため、引き継ぎが重要になってくる。しかし、担任が変わった時の引き継ぎの内容がほとんど児童の人間関係や保護者のことばかりで学習についての引き継ぎが時間をかけて行われていない。そのため新しい担任が4月、5月の学習状況を見て、またゼロから授業や子どもとの関係を作り直している。そういった課題を感じていたので、前任校では学力も含めて確認できる引き継ぎのシートを作った。経年で変化が見られるようにし、人間関係・学力・その子のよさ・苦手なことを一枚で見られるようにして引き継げるようにした。それらは進学先の中学校にも手渡した。実際の効果は検証していないが、教員同士で児童を観る視点を共有し、学力も含めて引き継ぐという意識の改善には十分につながったと感じている。

■村上委員

教員の時間の無さという話があったが、いわゆる忙しさからくる時間の無さとは違う時間の無さを感じている。以前は始業前に登校してきた子に対して学習に関するフォローやアプローチをすることができていた。また、給食の時間も配膳を子どもたちに任せて学習面で気になる子と呼んで、分からなかったところを教えることがあった。放課後の時間も、少し残って一緒に学習をする時間があった。しかし、最近は勤務時間のことや、給食の配膳対応など様々なことが厳密になる中で、以前はふとした時にアプローチできていた時間が無くなった。また、学習面で気になる子は友達との関わりを楽しみに学校に来ている子がたくさんいるため、休み時間に遅れている学習を一緒にやることはできない。そう考えると、その子たちのためにも授業ではない、いわゆる朝読書の時間のような、授業という枠ではないが、みんなが学習するような時間を設定できないかと考えた。例えば給食の後に時間を15分とり、児童それぞれが自分の進捗に合わせた学習目標をたてて学習にのぞむ。その中で担任として気になる子に個別に声をかけて一緒に学習したり、「今日の算数の授業で分からなかった子は一緒に勉強しよう。」と声をかけたりできる。

正答率40%未満の児童生徒は、教師が声をかけ、長い時間一人一人と向き合うことができれば、上の層に引き上げることができると感じる子が多い。学校

の組織で対応するという事は、先ほどのような時間の枠組みやシステムを作ることも大切だと思う。枠を用意して教員を信じて委ねることも必要である。本校でも授業の中で困っている子どもたちを何とかしたいと思う教員は多くいる。その教員たちと、その時間をいつ捻出できるのかを校内で話題にしたことがあったので、自分が思い描いている時間の設定について語らせていただいた。

■委員長

今、私が担当している研修の中で、指導主事対象の中間フォローアップ研修というものがある。6月に一回目の研修を行い、その後、受講者が自分の目標を決めて、仕事の対する取組を改善するというものである。多忙であることを課題として捉えた指導主事が、働き方改革のために、一日の中で毎日15分から30分の打ち合わせの時間をスケジュールとして設定するようにした。その打ち合わせは自分のために設定したもので、自分で勝手に作っており、その時間は他の打ち合わせもない。しかし、そうやって時間を作ることで、その時間は自分の仕事を振り返ったり、頭を休めたりする時間として設定しているそうである。

今、村上委員がおっしゃったように、短い時間でも設定して教員に時間の使い方を委ねて、例えば、自分のクラスの中では、こういう課題があるから、そのためにこの時間を使いたいというような発想をもって、その時間を使っていくことができたらかなり有効だと感じた。

学校は限られた時間しかない中で、教員は多忙であるということは誰もが認めている。多忙でない人は一人もいない。そうであっても何もしない時間や自分を振り返る時間は大切である。そして、子どもたちにとって大事な時間は削らないで、なんとかうまく時間を創り出せるのは、小学校は担任の力量にかかっている。そういう工夫も大事であるし、そういう心の余裕が庭田委員がおっしゃったような、子どもを価値づけ、認めていくということにもつながっていく。

■塚田委員

先程、事務局から説明のあったPDCAサイクルの調査について、私自身は

「あまりしていない」を選択した。質問は「P D C Aサイクルを確立していますか」となっているが、私自身の学校では確立している段階ではなく、構築している段階であると捉えている。学校重点プラン等を作成し、それを年度末に分析し、そこから次年度の手立てを考えている。それらも組織的にというか学校全体で取り組むことはできている。日課を組み替えてふりかえる時間も作っている。自校の子どもたちにつけたい力も明確にして、各種行事も組んでいる。ただ、実感として教員も私自身も子どもの変容がまだまだ見えてきていない。また、教員もそれぞれの役割の中でまだ温度差があるような状況である。それがP D C Aの確立かと言われたら、構築の段階だろうと考え「あまりしていない」と回答した。

しかし、市全体で重点プランや学力向上推進プランなどをつなげていくことや、それらをP D C Aサイクルで回していくことなどを様々な担当者会などで伝えてくれているので、その重要さは浸透してきていると感じる。今の状態を重ねていけば、課題としている数値は変わってくるだろう。

正答率 40%未満の児童生徒の割合を下げることについては、本校では学習支援員が有効であると捉えている。授業に入って授業者とは別に子どもに寄り添い指導することや、放課後学習でも活躍している。学習に遅れがある子を個別に取り出して授業をすることもある。そうすると、自信を持ってクラスの授業に戻れることがある。他には、本校では特別支援推進非常勤を活用している。リソースルームで不登校傾向の児童に、休んでいた時の授業の補習などを行い、ワンクッション入れて教室に入れるようにしている。いっぽうで、授業改善については、まだまだであると感じている。校内研究と授業改善を関連付けてはいるが、まだまだ子どもの実態や結果に結びついていないのが本校の現状である。

■委員長

P D C Aサイクルの確立については、今回の学習指導要領で大きく打ち出された。P D C Aサイクルを回していくためには、節目節目でどう振り返るかが大切である。節目節目で自校の実態を捉えた上で、そのP D C Aサイクルを見直すことが大切である。だから「P D C Aサイクルが確立されているか」とい

う質問は P D C A サイクルを意識して学校が教育活動に取り組んでいるかどうかを質問していることだと私は捉えている。もちろん、言葉の捉え方によっては回答も変わってくることもあるのだろう。しかし、それでも、40 対 8 という数字のインパクトはそれなりに何か原因があるだろうと思っている。

■高橋委員

協議題では、正答率 40%未満の児童生徒というくくりになっているが、実際の生徒をイメージすると様々な生徒の顔が思い浮かぶ。例えば知的な障害をもっている生徒や、いつも学校に来られないがテストだけでも受けに来ればと教員から声をかけられる生徒、毎日とにかく給食だけでも来るように言われて学校に来ている生徒、保護者がネグレクト傾向にある生徒などである。

そういった背景がある生徒たちやその子たちを何とかしたいと思っている教員に、授業に参加させて正答率を上げてほしいとは到底言えない。まず授業だけ来ればいい、テストだけ受けに来てもいい、給食だけ食べに来ればいい、そうやって友達や教員とつながっていればいいという生徒がたくさんいる。学校や教員の手の届かないところに理由がある子も正答率 40%未満の児童生徒の中にはいるのだから、ただ単に正答率を上げるということではなく、そういった生徒が、どうしたら学びが楽しくなるかという授業の魅力とセットで考えていかないと、教員の気持ちも萎えてしまう。正答率をいかに上げていくかということや、正答率 40%未満の児童生徒の数をとにかく減らすというよりも、やはり、その子たちが学びを楽しみと思えるようにするにはどうしたらいいのかを考えて、教員の授業に対する考え方を改めていく必要があると感じた。

その授業の在り方についてだが、先ほどから、勉強が苦手な子どもたちに対する学習支援や、短い時間の補習などの話題があった。そういうことは、これまでも学校は一生懸命やっている。しかし、その時に学習が苦手な児童生徒にどのような指導が行われているかという、短時間で基礎的な部分を指導することが多いので、教師が与える課題は、どうしても一問一答のような課題になり、それらを繰り返しやらせるような指導になってしまう。確かに、その子もそういった課題はなんとなくできるようになったと感じるだろう。では、学力・学習状況調査のような問題に挑めるのかというと、そこには繋がらない。

この学力・学習状況調査の正答率 40%未満の児童生徒の数を減らしていくためには、やはり思考力や判断力を育む指導や白紙で回答するのではなく何か書こうとする子が育つ指導をしていかねばならないのではないかと考える。とりあえず九九ができるようにとか、漢字が書けるようにという指導はいっぱいやっているし、子どもたちも頑張っているが、この正答率を上げることにつながっているかは疑問である。だからこそ、教員がどのような授業をつくるかが重要になってくる。

ポイントになるのは、解けそうで解けないような少し難しい課題にどう取り組ませるかだろう。教員は困難な課題や難しい課題が出た時に、つい目の前の子どもたちがかわいそうになって、細切れに発問して誘導したり、ヒントを与えたりして、できるだけ苦労させないで、みんなと一緒にできるようにいろんな仕掛けをすることがある。そういったことが授業の工夫だと思ってきたし、学習につまずきのある子への手立てだと思ってやってきた。しかし、実はもっと子どもたち同士に課題解決を委ねて、今日の授業では答えなんか出なくていいと教員が開き直れるくらいでよいのではないか。授業の中で何がわからなかったかが言えればよいというくらいのスタンスが必要である。これまでの授業のように限られた 45 分や 50 分で、分かった人やできた人をできるだけ増やすような授業ではないということだ。つい、わかった人やできた人をできるだけ増やすためにヒントを出したり型にはめるようなワークシートを作ったりしても、いつまでたっても真っ白な紙に自分の考えを書くことなどできる子どもは育たないのではないかと思っている。

そのためにも教師の授業のつくり方はもっと長いスパンで考えることが必要である。45 分や 50 分の一単位時間完結型ではなく、例えば教育課程の組み方を工夫し、2 時間続きの授業をもっともっと取り入れれば、子どもたちが悩んだり、友だち同士でじっくり議論したりする授業が作れるのではないだろうか。特にその部分では中学校は変わっていく必要がある。タイマーで話し合いを切るような授業ではなく、子どもたちの意見が誰も出なくなるまで話し合うような授業ができるような 2 時間続きの授業を組んでみるような思い切った教育課程編成を考えてみてもよいのではないか。また、教師もヒントを出すのではなく、そこで子どもたちが悩んだことや言った言葉を見取り、できたかどうかではなく、悩んでいた姿や話し合っている姿そのものをすごいねと言いながら評価する。

そうやって授業をつくり、もっと教員が安心して、子どもたちの学びを楽しんで見ていく。これまでのような子どもたちの学びを管理するような授業ではなく、子どもと同じ目線で学びを楽しむという授業を大胆に取り入れていく必要があるのではないかと思っている。

■委員長

協議題にある正答率 40%未満の児童生徒に関しては今の高橋委員がおっしゃったような認識で委員の皆さんは捉えていると思う。また冒頭で話したが、全国学力・学習状況調査の数値を上げることが目的ではなく、本当に子どもたちに学校に行って楽しいと思えるような環境の中で学びを進めていくことが重要であるということは確認したことである。

これまでの話を聞いていると、学校の実態も違えば学校の課題も違うし、対応の仕方も違ってくる。A校とB校が同じ対応ができるわけない。だから先ほど石井委員がおっしゃったように、学校の教員だけで解決できるような問題でない場合には保護者やPTA、様々なリソースの力を活用しながら子どもたちを支えていかねばならないと考えている。

■小日向委員

正答率の分布図を見て、全体の2割ぐらいの児童生徒が正答率 40%未満の枠に入っている。自校で考えると、非常に不登校が多く、学年で毎日 25 人ぐらいが欠席しており、一クラスが 30 人程度なので毎日クラスで 8 人から 10 人ぐらいが欠席している。正答率 40%未満の生徒と聞いて欠席している子たちの顔が思い浮かんだ。

今、学校に入れないうちがすごく増えている。その理由として学習についていけないこともあるが、様々な不安を抱えて教室に入れないうちのような学習以外の要素もある。学習だけではなく、学校に居心地のよさや希望のようものをもたせることが重要であり、学ぶ前提として、学校が安心できる空間である必要がある。

本校は不登校の生徒がとても多い学校なので、教員同士が協力して生徒にア

アプローチできるような支援体制を工夫しているが、教員だけでなんとかしようとするのは無理なので、子どもの力を借りて、授業の中でお互いに助け合うような場面を作っている。学力別に分かれる良さもあるが、様々な学力層の子どもがいることが、逆に良さでもある。分からないことやできないことは悪いことではなく、分かるようになること、できるようになることが大事であると生徒にはよく話している。また、授業の中で分かる子がいたら 分かることを教えてあげて、分からない子は教えてもらうことが大切であり、そのために授業があるという話をしている。そうやって生徒が学び合える関係づくりをまず作っている。そうしないと教師が全部サポートしなければならず、学習についていけない生徒は全て別室で授業をするようになったら不登校も学力の問題も解決しないだろう。今の主体的・対話的で深い学びの実現に向けて、お互いに学び合い、教え合うような学習は、不登校対策や安心できる教室づくりにもつながっていると感じる。

他には今の学習指導要領になり、全ての教科で学力の三要素が揃ったことにより、校内研修で他教科の教員と話す機会が増え、授業の中で参考できることが増えた。また、総合的な学習の時間では、教科のつながりを感じられるようになった。学習の中でやることを増やすというより、むしろ減らしていけるような感覚である。私は外国語科の教員なので、コミュニケーションを図る資質・能力を育成することができる。例えば資料活用之力ならば社会科の教員に任せ、文章力は国語科の教員にお願いするなど協力しながら学習を進めることができるようになった。生徒の情報も共有でき、教室の中の生徒の力がでこぼこしているように、教員もでこぼこしているが、教員同士が支え合えるようになってきたと感じている。それも校内研修のおかげであると思っている。

校内研修のよさは他にもある。教員が自信をもてたことである。教員はもっと自信をもちたいと思っているが、どこか授業づくりに対して不安に思っているところがある。そんな時には外部人材を活用するのが非常に有効である。今の校内研究には指導主事や大学教授が多く関わってくれている。指導主事や大学教授が様々な教員のことを褒めてくれ、この半年でたくさん教員の表情が明るくなってきた。教員が自信をもち、気持ちにも余裕ができ、教員同士がつながれているのではないかと思っている。

■新田委員

今みなさんのお話を聞いて、学校そのものの在り方が問われていると感じた。これまで私自身が学習に苦手意識をもつ生徒が多い学校に赴任することが多くあった。そこで、そういった生徒に対して学校で必要だと感じたことは二つある。教員の見取りの確かさと、授業中の教室が「ねえ先生、わかんないんだけど」と言える空間になるということである。

子どもの見取りについては、授業の中では子どもを観るとよく言うが、本当に観ているのかと疑いたくなる教員も少なからずいる。教員の問いかけの意味さえわからないという表情を見抜いているか、話し合いが真剣に議論されているのか、グループで話しているだけで対話しているような錯覚に陥っていないかなど、子どもの姿を的確に見取る技術が教員には求められる。

次に、分からないと言える教室についてだが、まず教員自身の意識を変えていく必要があるだろう。教員は、みんなが同じように前を向いて学習に取り組んでいないと不安になったり、学習に苦手意識をもつ生徒が「ねえ先生、わかんない」と声をあげる状況に、ある種の緩みが生じているような感覚になったりすることがある。また、学習が苦手な子だけでなく、学力が高い生徒たちも放っておくことはできない。ICTを活用した個別最適な学びも行っていく必要があるだろう。本来、生徒の学力は多種多様なのだから同じように同じ時間で学ばなくてもよいはずである。学校組織という同調圧力もあるのかもしれないが、生徒それぞれが自由に学ぶことに何か恐れのようなものをもっているように感じる。このように、学校の在り方をもう一度見直していかなければと思うが、実際に実行しようと思っても、日常的に問題行動をおこしている生徒や、学びに背を向けている生徒に対して、こういった授業が成立するのかという不安要素もでてきて難しいと感じてしまう。小日向委員の発言にあったように、不登校の問題も生徒指導の問題も全部、この学力の問題とリンクしていると感じている。

この他に、正答率40%未満の生徒は小学校のころから疎外感をすごく感じていることが多い。また、教員は基本的に勉強がある意味できてきた人が多いので、その子たちの気持ちやなぜできないのかという原因が分からないでいる。そういった子の分からなさや小学校時代からの背景、家庭環境に興味をもちながら担任だけではなく、たくさんの教員や大人が支えていく必要があるだろう

う。

■委員長

事務局は、指導主事として様々な学校を訪問しているが、実際の授業を観ている中で、これまでの委員から出た意見と結びつくようなことはあるか。

■事務局

小学校3年生の総合的な学習の時間の研究授業を参観した際に、高橋委員の「教員はみんなを時間内にできるようにしなければと思いがちである」という話と結びつく場面があった。その授業は、学んだことを伝えるのにグループで話し合い、ポスター・看板・壁新聞の中から一つ、効果的な方法を話し合いで選ぶという授業であった。かなり時間をとって話し合い、ほとんどの班が一つに決めることができたが、ある班だけが議論が白熱してしまい、時間内に一つに決めることができずに授業が終わった。研究協議の中で、教員はそのことを失敗と捉えており、どのように子どもたちに声をかければ良かったか教えてほしいと助言を求められた。私は、それは失敗ではなく、子どもたちにも「一つに決められないぐらい真剣に話し合えたのですね。素晴らしいですね。」と声をかけ、教室のみんなにもそのよさを伝え、そのグループの話し合う姿勢を価値づけしたいと助言した。

また、他に参観した授業では、教員が「教室は間違ふところだ。」と自ら発言しているにも関わらず、時間内に授業を終えようとするあまり、教員が求めている回答をする児童の発言には反応せず、正解した児童ばかりを褒めている授業を観たこともある。時間をかけてじっくり授業をしてよいという認識ができれば、一人一人の考えや発言のよさを楽しんだ授業づくりができるのではないかと各委員の話を聞きながら感じた。

■事務局

授業を参観して、すごくいいなと感じた授業は、先ほどの新田委員の発言に

あった、分からないことが分からないと言える環境が備わっていた。昨日観た授業を行った教員は、日頃からクラスのみんなの分からないという発言がみんなの学びになるということを伝え続けている。授業の中では、児童が言ったことに対して、教員がそれを言い換えてまとめることをせず、別の児童に「どう？」とだけ問い返す。それを聞かれた児童が「分からない。」と答えても「じゃあAさんがわかるようにもう少し考えてみようって。」と発言をつなげていく。このような授業が一つの授業だけでなく全ての授業で行われている。学習に苦手意識がある子も、みんなと一緒に考えてくれる、自分はここにいていいんだ、分からないと言ってもいいという意識になってくる。そういった雰囲気はすごく浸透している学級を見ることがある。いっぽうで、授業のねらいがはっきりしていない授業や先生が時間内にここまで到達しなければと焦るあまり、子どもの色々な発言を聞かないで、答えを示してしまうような授業も見受けられる。

学び合える環境をつくることや教員の懐の広さが、どんな授業においても大切だということは日頃から感じていることで共通していた。

■委員長

これまで委員の皆さんが発言したことは、様々な点でつながり、共通していることばかりである。どこの学校にも一定程度いる正答率40%未満の児童生徒に対して何かしらのアクションをしていきたい。この層の子どもたちは、学びに対して背を向けている子や、学びに参加すらもできない子もいる。学ぼうと思っても、学び方がわからない子もいるだろう。では、その子たちのために、この学力向上推進委員会として、どのようなメッセージ出せるかを考えていかねばならない。

例えば、先ほどから発言の中にある学校重点プランについてだが、各校の重点プランは全方位的にやろうとしていないかを管理職に問いかけてみたり、逆にどこに焦点を当てて学校重点プランを作っているのかを確認したりすることもできるだろう。また、教育課程編成についても、学校に委ねられた最も重要なもので、その編成権は学校長にあるわけだが、毎年大きく変えようとしないう学校ばかりなのではないか。この時代、様々な子どもがいて、課題も様々な

らば、もっと特色ある教育課程編成をしてもよいのではないか。そのことは文科省も認めていることである。そういった教育課程を大きく変えないで課題が改善しないと言うのではなく、思い切って教育課程を大きく変えてみて、それでも課題が改善しないならばその原因を考えていくようにしなければ、いつまでも大きな改善は見込まれないと考えている。

さらに教員の意識の変容についても考えていかねばならない。これまで委員の皆さんの発言にあったことは、学習指導要領に書いてあることばかりである。本来、それは教員が意識をもって取り組まなければならないことだが、それができていない。学習指導要領の総則を学校の全員が読み込み、お互いに疑問をぶつけ合っているような学校はないだろうか。

そういう状況がある中で改善できることはないか、この委員会では考えていかねばならない。これまでも、いくつか意見の中でご提案いただいたことがあるが、他にどのようなことができるか意見をいただきたい。

■石井委員

私は何年か前から小学校や中学校でPTAの役員をやっている。先生方の授業やカリキュラムはある程度決まっているとは思いますが、先生方の働き方改革のためにも、授業のお手伝いはできないものかと保護者たちとは、よく話をしている。例えば、社会科の授業になるかもしれないが、地域の方に町の歴史を聞いたり、町名の由来を教えてもらったりするような授業などができるかもしれない。町のことなら地域の方も語れるし、それによって地域の方も学校の教育活動に参加することができる。地域の方たちとの触れ合いという部分でも効果が期待できると思う。

また、今、学校運営協議会に委員として参加しており、それが地域が学校とコミットする良い仕組みだと思っている。しかし、その会議内容は一年毎にリセットされているように感じている。年度の最初に学校のグランドデザインを聞いて、給食を食べ、毎年同じような話を繰り返しているような気がしている。せつかく地域の方たちと一緒に話をしていくのであれば、その地域でしか学べないような授業づくりについて考えたり、連携ができることについて話し合えたりすればよいと思っている。そして、何か連携することで、先生の負

担を軽減できるのであれば行ってみたいと思っている。

■委員長

地域にまつわる話題を求めている子どももいるかもしれないし、子どもたちにも学びの選択肢を増やすことはとても重要なことである。

また、今の話を聞くと、やっぱり形式的な会議を続けてはいけないということ考えた。連続性や継続性を大切にして持続可能な形で会議をしていくためには、前年度のことを繰り返すのではなく、積み重ねていくようにしなければならない。また、そういう会議を重ねることで教員の負担軽減に少しでもつながり、それが、さらに教員の子どもと向き合う時間の確保につながると思う。

他に、各校で意識して意図的に取り組んでいるようなことはあるか。

■庭田委員

今年4月から、ろう学校に赴任して、言葉がもつ力を強く感じている。小学校の児童は語彙が少ない分、持っている材料が少ない中で思考を組み立てなければならず、さらに語彙が少ないためコミュニケーションもうまくいかない。絶対的な情報量が足りない中で自分の考えを構築するという事は難しいため、どうしても、そこに教員が支援をすることになる。そして、同学年で2人しかいないクラスや、さらには、重複障害と単一障害でクラスを分けて教員と児童が1対1で授業を行う場合もある。そうすると教員が手取り足取り手助けしてしまい、語彙が増えていかない状況が生まれる。自分の感情を表出する語彙も増えていかない。それがずっと積み重なって、6年生の段階で低学年と同程度の語彙しか持っていなければ、学校生活や日常生活はつらいものになってしまう。だから学校全体で言葉の大事さを確認している。

教員は目の前の子どもが、自分の言葉を理解できているのか、理解できていないのであれば、この後の言葉も伝わらないだろうと予測して使う言葉を考えていく。教員は言語優位な人が多いぶん、子どもたちに使う言葉をしっかりと考え、子どもの持っている語彙やその子が伝えようとしている感情を教員側がきちんとくんであげながら、手を出し過ぎないようにして子どもたちと接する

ように校内では確認しているところである。

■委員長

先ほどの高橋委員の発言にもあった思考力、判断力、表現力なども、まさに語彙がないがゆえに思考につながらないということもある。

以前の学習指導要領の中で言語活動の充実がうたわれていたが、今回の学習指導要領で言語活動の充実が蔑ろにされているわけではなく、言語活動はすべての教科の基盤として取り組むことは示されている。言語活動は主体的・対話的で深い学びを生む基礎となるものである。

他に市教委が各学校に重点プランの作成を依頼しているが、それについてはいかがか。私はこの委員会の仕事を引き受ける際に、横須賀市の全ての学校の重点プランを確認したことがある。学校の現状を踏まえてよく分析をして、構造的にプランを組み立てている学校と、正直そこまでできてない学校とが見られた。また、このプランの中には学校長が書いているのか、誰が書いているのか分からないようなものもあった。学校重点プランについて、どなたか意見はあるか。

■新田委員

この学校重点プランについては、様々な提出書類を出す時期と作成時期が重なっており、学校によっては担当任せになっていたり、毎年同じように書いてしまっていたりすることがある。

■委員長

先ほど、事務局がPDCAサイクルについて事例として報告した学校はどのように作成しているのか。

■事務局

2月・3月をこの学校重点プランの振り返りと次年度のプランの作成の時期と決めて、様々な振り返りの会議のための時間設定をしていると聞いている。各グループの総括教諭が中心となって、各担当を集め話し合い、最終的には企画調整会議などで、さらに最終調整をしているとのことであった。

■委員長

やはり一定期間、このプランを組み立てるための振り返りの時間を設定し、組織として作成していかなければならないだろう。教員個人に作成を依頼するのではなく、組織として作成することが重要であり、それが学校全体のPDCAサイクルを回すことにつながってくる。

今後はこの重点プランの作成や振り返りについて、市教委が校長や教頭、教務主任や各担当者に対して、その立場に合わせた活用方法や振り返り方を伝えていくこともできるだろう。また、学校としても学校重点プランの作成においては意識的にグループを活用することや総括教諭を中心とした組み立てについて考えていくべきであろう。

今年度、たまたま横須賀市の総括教諭研修の講師をさせていただいた。研修の感想の中に、校内の総括教諭どうしが普段話し合う時間がなかったので研修の中で、総括教諭どうしで話し合う時間が持てたのが有効だったという意見が多くあった。学校の中でグループ長どうしが話し合うことすらもなかなかできないのであれば、話し合う時間を意図的に作り出すことも必要だろう。改めて時間を設定するのが難しいのであれば、校内研修の中にそういう時間を組み込むことも考えられる。

今日出た様々な意見のように、それぞれ立場やそれぞれの学校で何ができるかを考えることが大切である。そして、各自が行ったことを事例として出し合いながら効果的だと考えることをそれぞれの学校が選択していくようなことができる。本日の議題にあった正答率40%未満の児童生徒の現状を改善していくことにつながるだろう。そういった児童生徒にフォーカスしていくのは致し方ないが、そのことを考えることは、学校全体をどう回していくかということとつながってくる。その際には保護者や地域の力も借りていかなければならないだろうし、その他いろいろなりソースを組み入れなければならないと思う。その

ためこの課題はここで終わりではない。今後も、このことについて、引き続き皆さんの意見を聞かせていただきたい。

令和6年度

第2回 横須賀市

学力向上推進委員会

- 令和6年（2024年）10月30日（水）
- 横須賀市役所 301 会議室

【次第】

1 開会

2 教育指導課長あいさつ

3 報告

①学力向上推進プランに掲げた目標の実現に向けたこれまでの取組と成果

②全国学力・学習状況調査（小6・中3）の分析結果

～教科に関する調査結果と質問調査結果のクロス集計～

資料1、2

4 協議

〈協議事項〉

正答率 40%未満の児童生徒が一定数いる中で、学力層全体の引き上げを図るために、学校が組織的、継続的に取り組めることは何か。

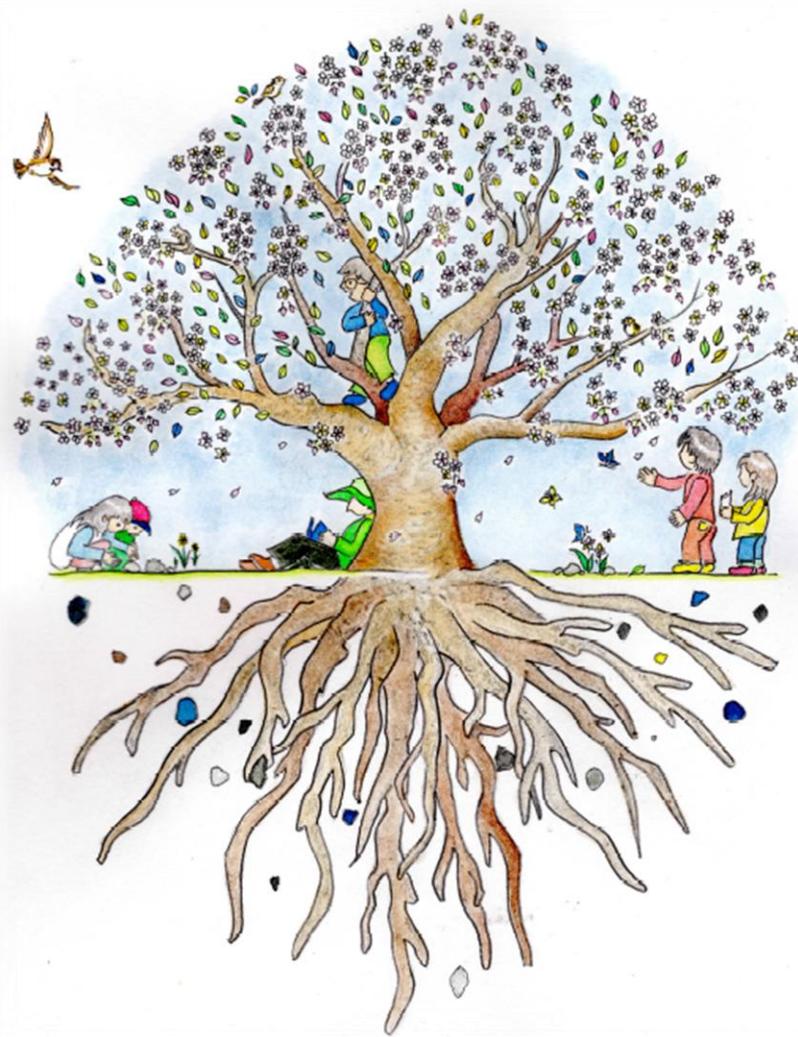
資料3、4

5 連絡

※資料4については、協議のみに使用し、非公開とする。

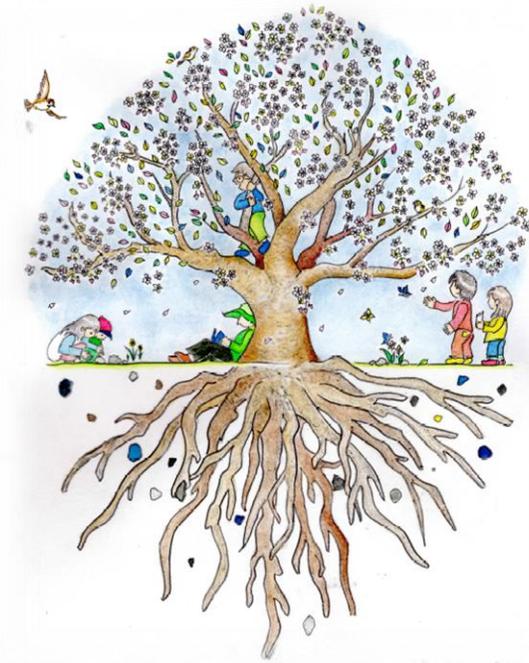
7 閉会

学力向上推進プランに掲げた目標の実現に向けた取組と成果



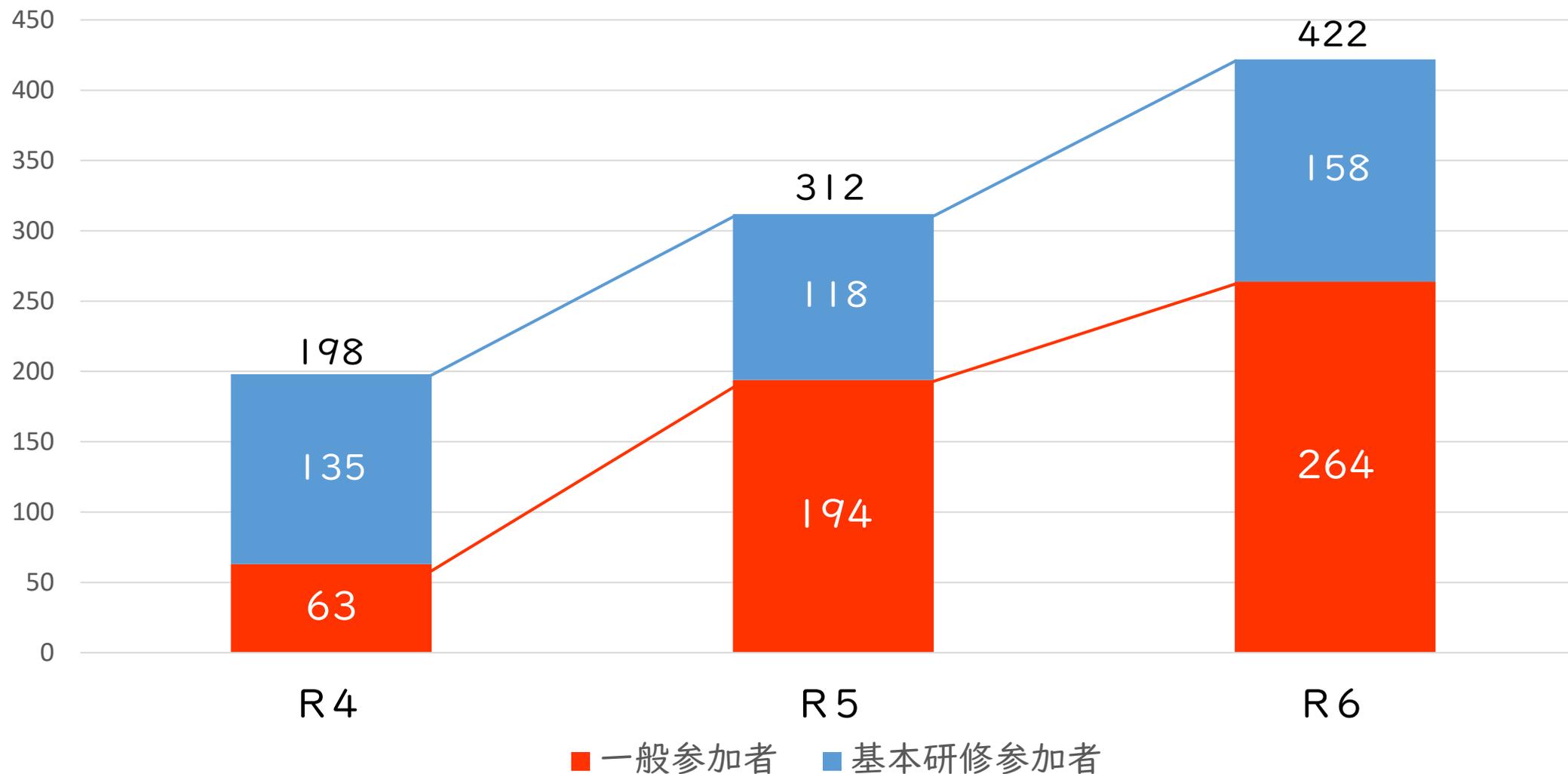
横須賀市学力向上推進プラン

令和4年度（2022年度）～ 令和7年度（2025年度）



横須賀市教育委員会

教科等指導員の公開授業参加者の推移



推進プランの目標の実現のためには、学校が組織全体で継続的な取組を行う必要がある。学校は教育目標と、それらを実現した姿をより明確にし、職員全体で学力向上に向けた意識と実践の共有を図ること。教育委員会は、推進プランで定めた目標指標に関する数値に向上が見られた学校の取組を分析し、市内全学校へ授業改善の視点として明示すること。

『横須賀市学力向上推進プランに定めた目標の実現に向けた課題および改善策について（答申）』より一部抜粋・該当部色付け

令和6年3月22日 送付

R5 (2023)

横須賀市学力向上推進プランの目標指標に関連する調査結果が
大きく上昇した学校の取組についての分析(報告書)



学力向上推進プランの目標を実現させていくためには、全ての教職員と目標を共有し、横須賀市全体で組織的に学力向上に取り組む必要があります。

本報告書は、令和4年度から令和5年度にかけて、学力向上推進プランに掲げた3つの目標に関連する調査結果を大きく上昇させた学校の取組と、各学校で参考にできる「指導に生かせる視点」を4つ紹介しています。

これらを共有することで、本市全体の学力向上の取組をさらに活性化させ、横須賀の全ての児童生徒に「確かな学力」を育成することを目指します。

ver. 2024.03.15

指導に生かせる視点

日常的に自由に話し合える風土

安心して学ぶことができる教師のかかわり

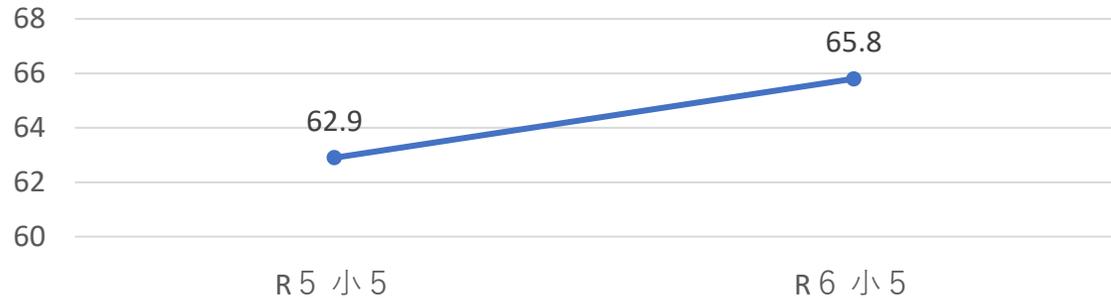
必然性のある動機付け

学びの自覚や実感を伴った振り返り

目標①学び合う集団の育成を図る（肯定回答の割合）

小

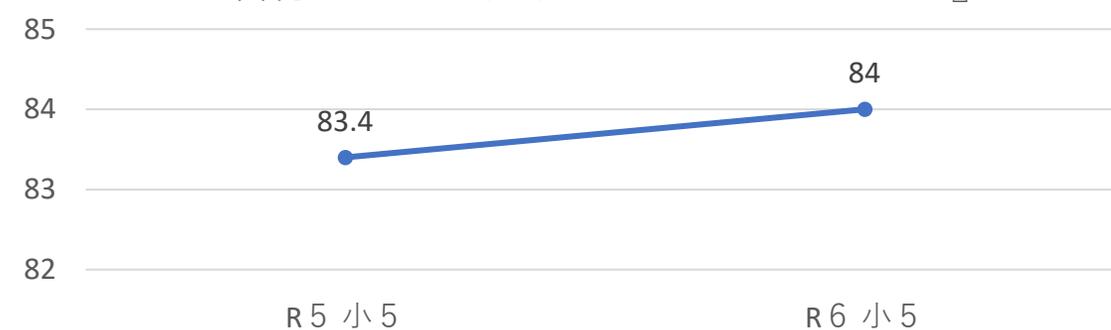
『授業等で自分の意見を広げ、深めているか』



『みんなで課題解決する場面で協力する』

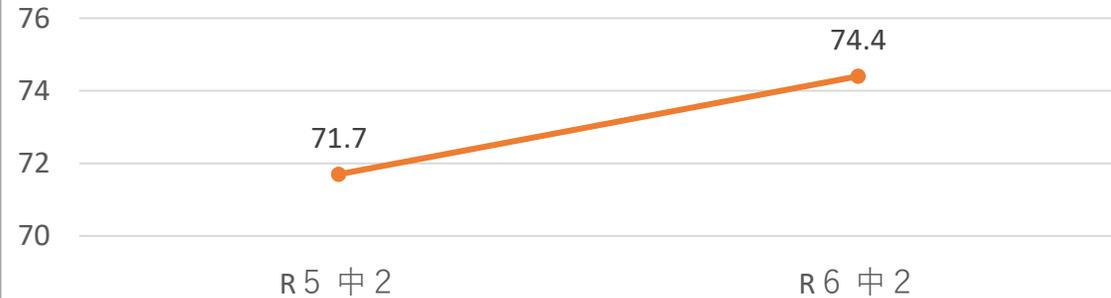


『自分のことを大切に思うことができる』



中

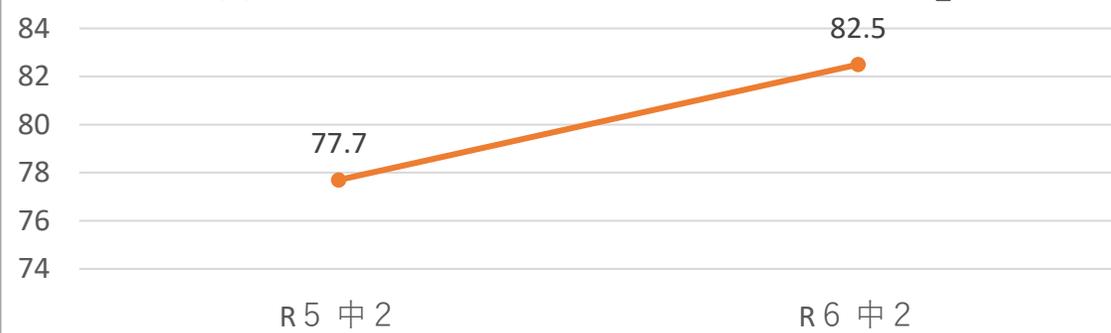
『授業等で自分の意見を広げ、深めているか』



『みんなで課題解決する場面で協力する』

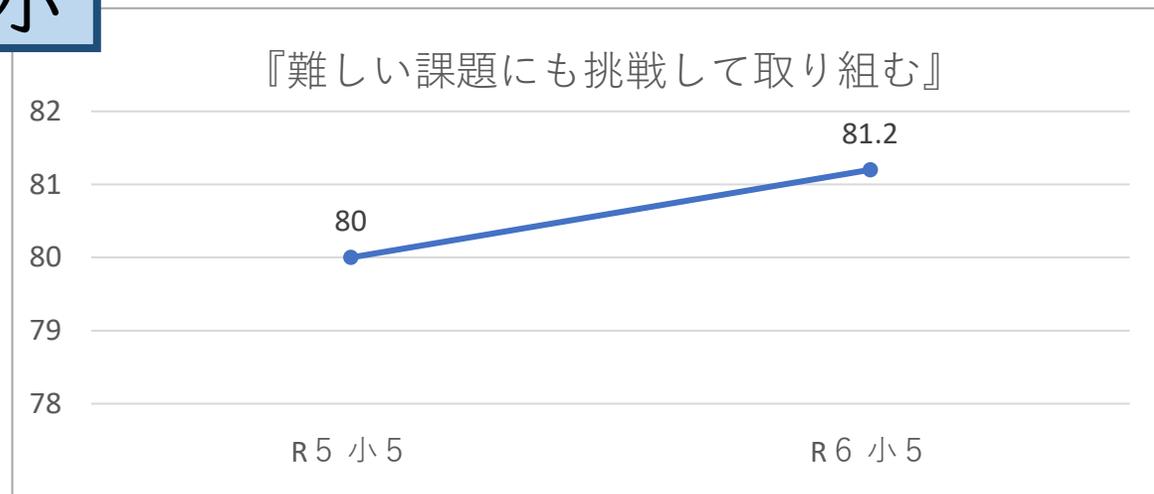


『自分のことを大切に思うことができる』

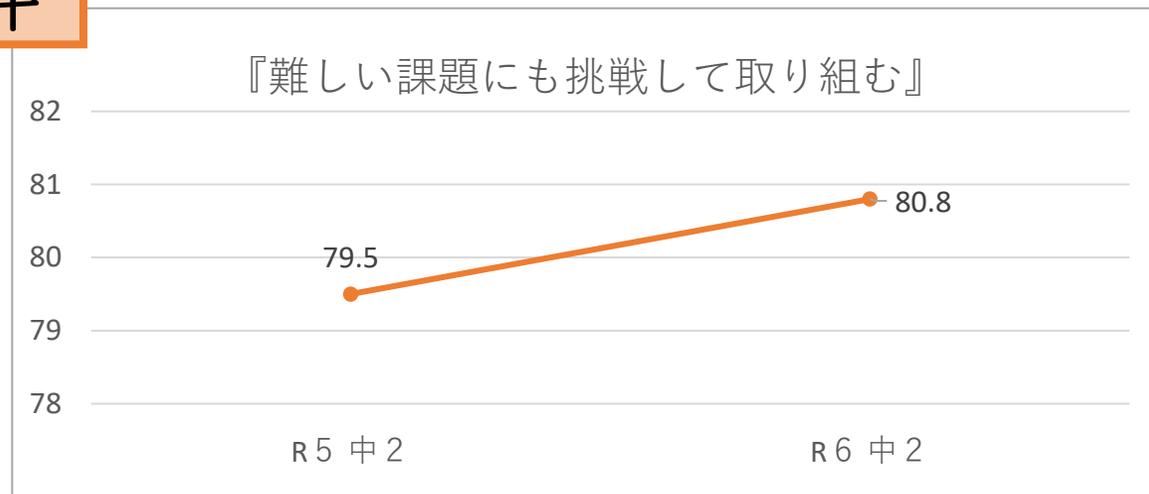


目標②粘り強く学ぶ力の育成を図る

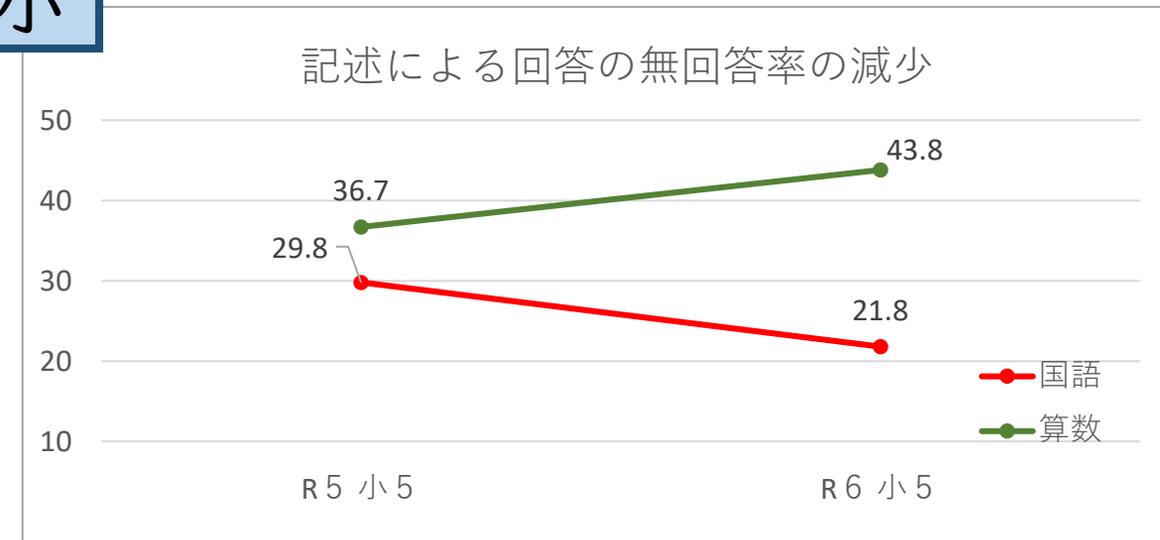
小



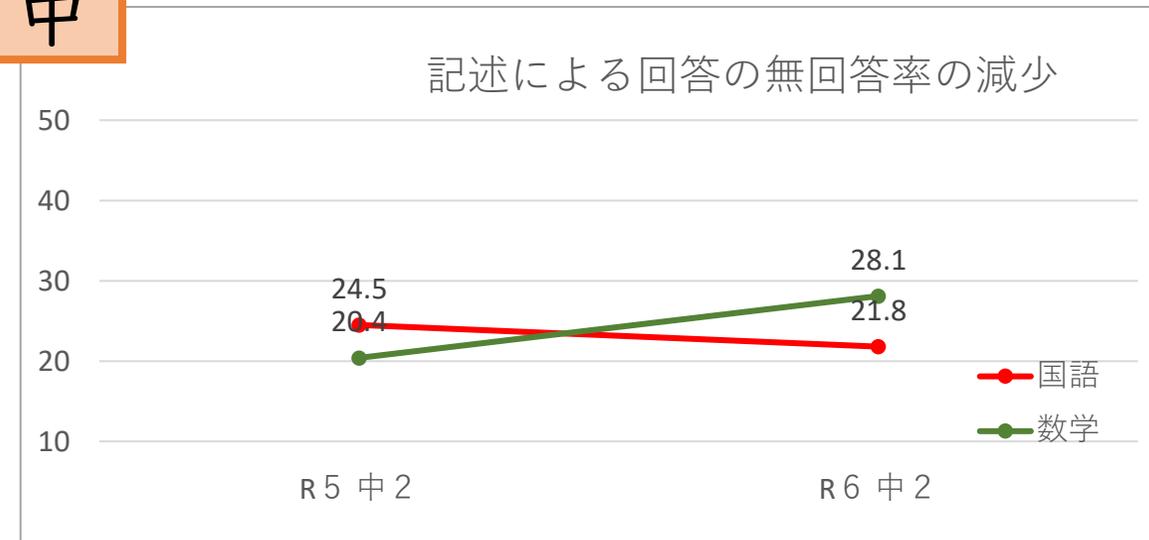
中



小

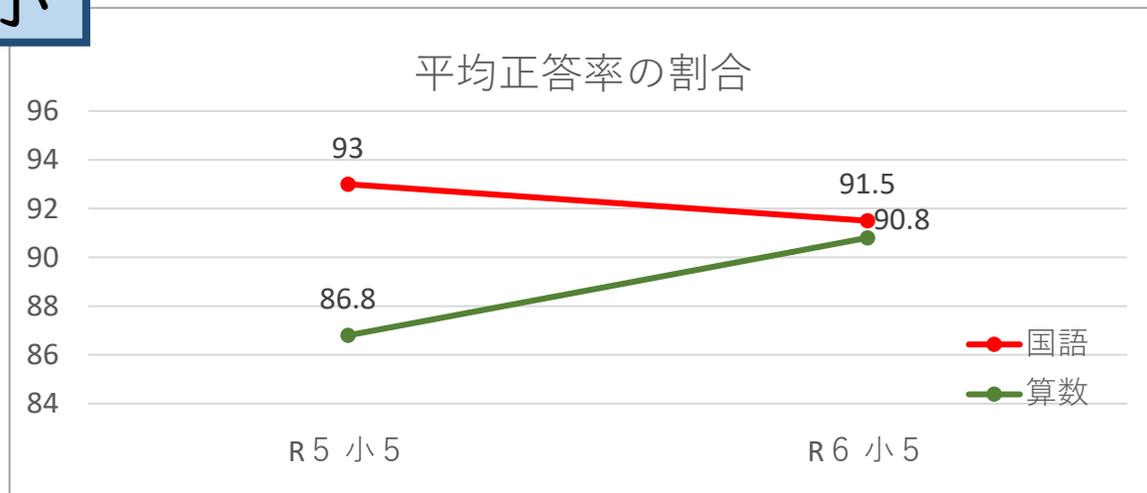


中

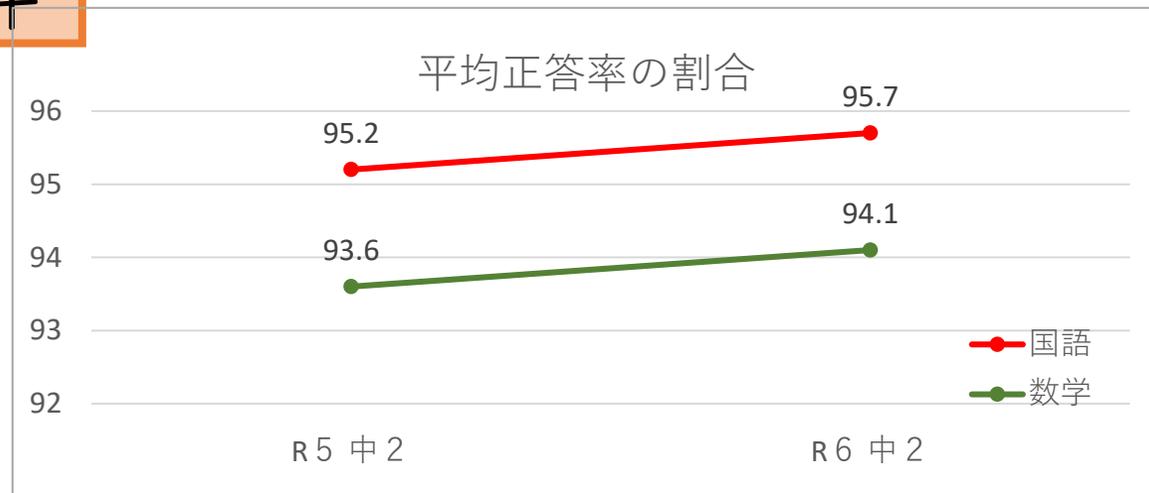


目標③学力層全体の引き上げを図る

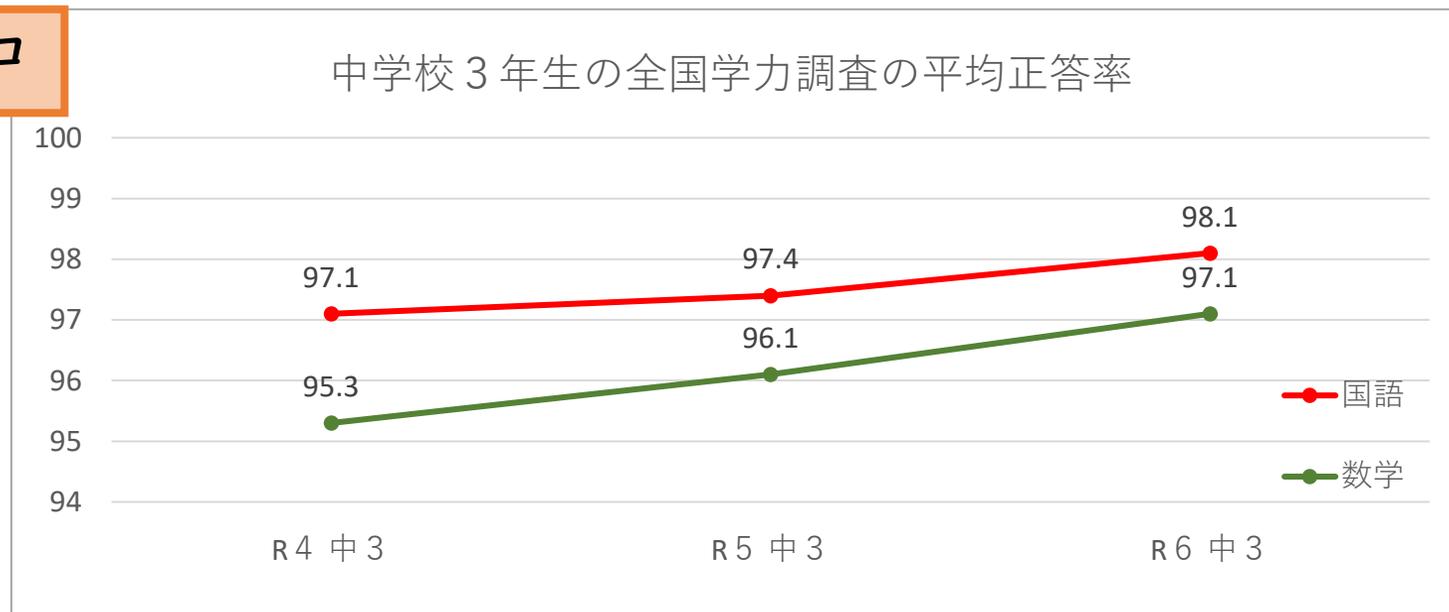
小



中



中

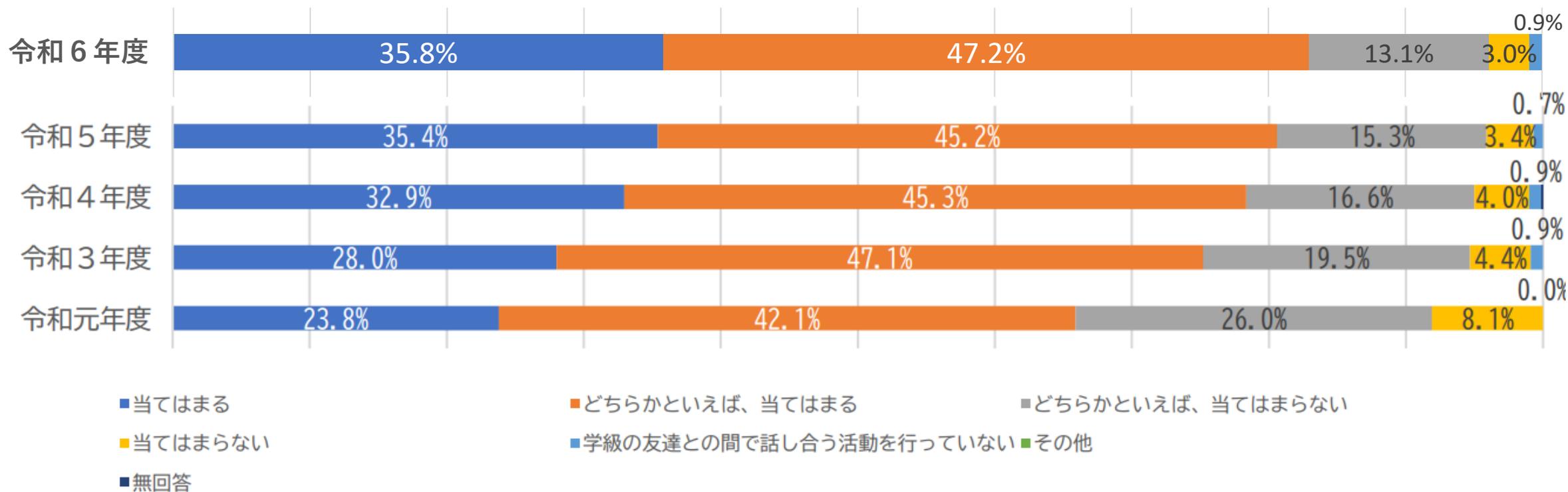


全国学力・学習状況調査（小学校）

学力向上推進プラン目標1
の意識調査と酷似した質問

質問紙 36 学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか（小学6年生）

※令和6年度は質問（33）…自分の考えを深めたり、**新たな考え方に気付いたり**することができていますか

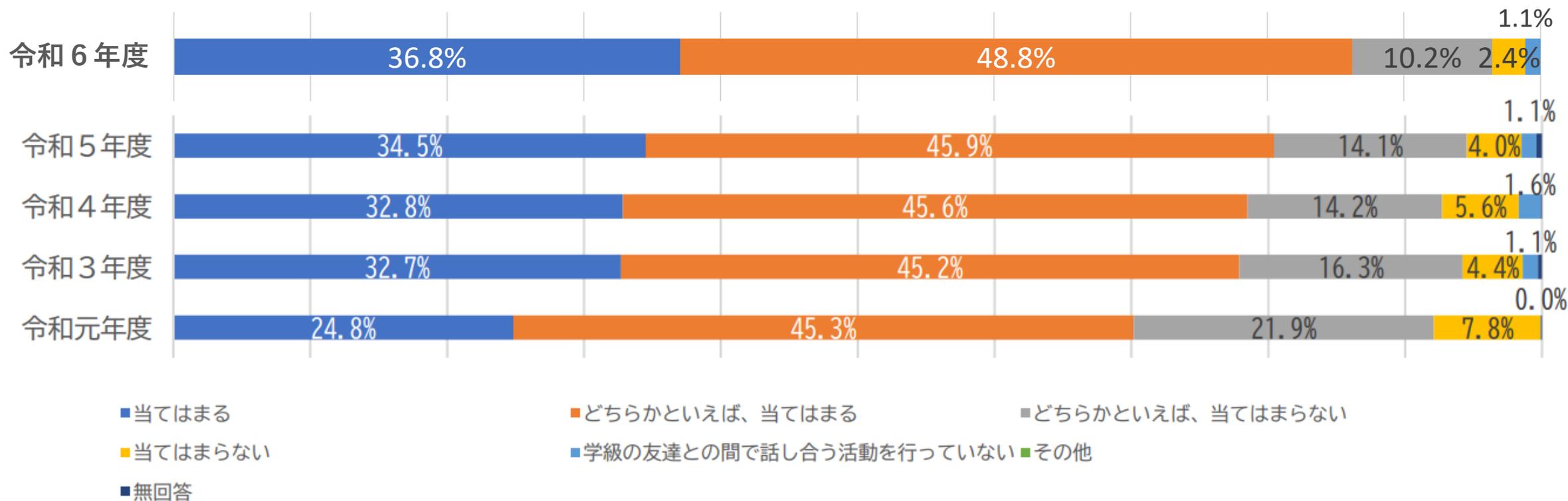


全国学力・学習状況調査（中学校）

学力向上推進プラン目標1
の意識調査と酷似した質問

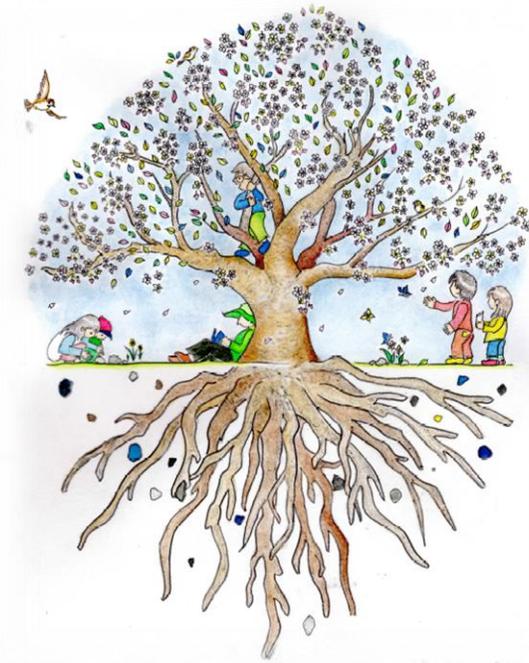
質問紙 40 学級の生徒との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか（中学3年生）

※令和6年度は質問（33）…自分の考えを深めたり、**新たな考え方に気付いたり**することができていますか



横須賀市学力向上推進プラン

令和4年度（2022年度）～ 令和7年度（2025年度）



横須賀市教育委員会

各小中学校において

『主体的・対話的で深い学び』の実現に

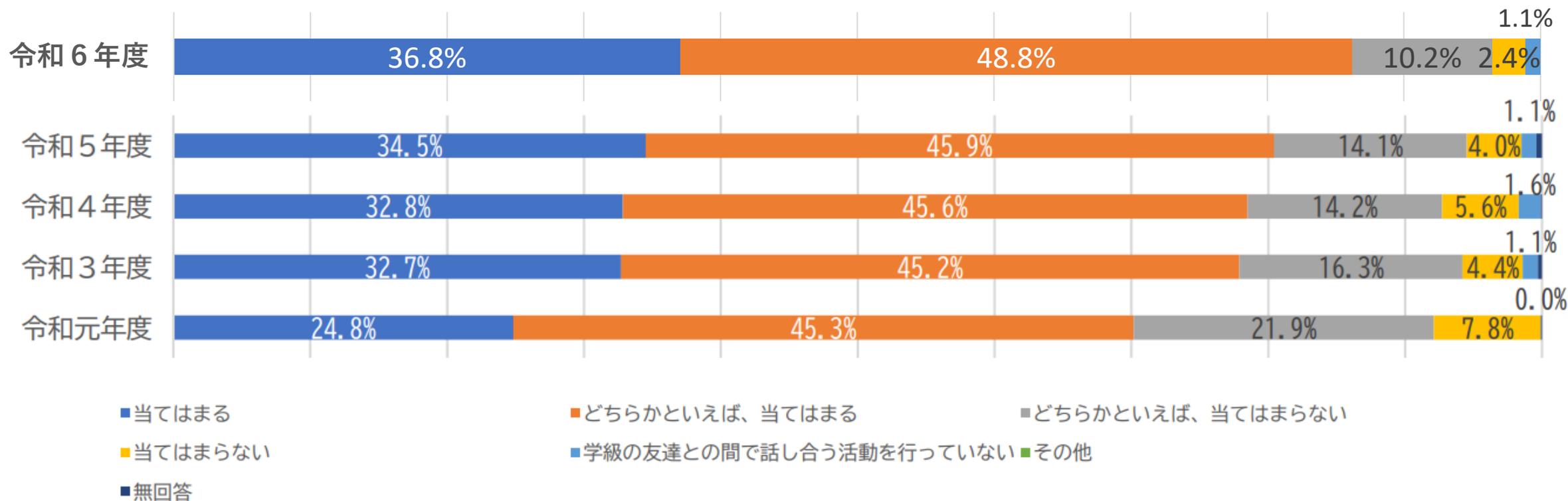
向けた**授業改善**の取組が進んでいる

全国学力・学習状況調査（中学校）

学力向上推進プラン目標1
の意識調査と酷似した質問

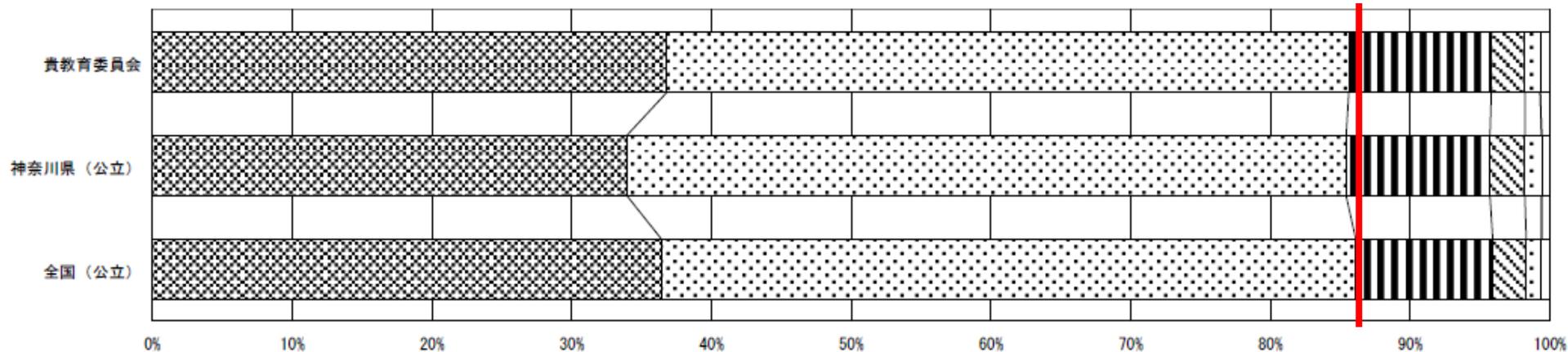
質問紙 40 学級の生徒との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか（中学3年生）

※令和6年度は質問（33）…自分の考えを深めたり、**新たな考え方に気付いたり**することができていますか



質問番号	質問事項											
(33)	学級の生徒との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気付いたりすることができていますか											
選択肢	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	その他	無回答
貴教育委員会	36.8	48.8	10.2	2.4	1.1						0.0	0.7
神奈川県（公立）	34.0	51.5	10.3	2.5	1.2						0.0	0.6
全国（公立）	36.4	49.7	9.8	2.4	1.1						0.0	0.6

☐1. 当てはまる ☐2. どちらかといえば、当てはまる ☐3. どちらかといえば、当てはまらない ☐4. 当てはまらない ☐5. 学級の生徒との間で話し合う活動を行っていない ■ その他 □ 無回答

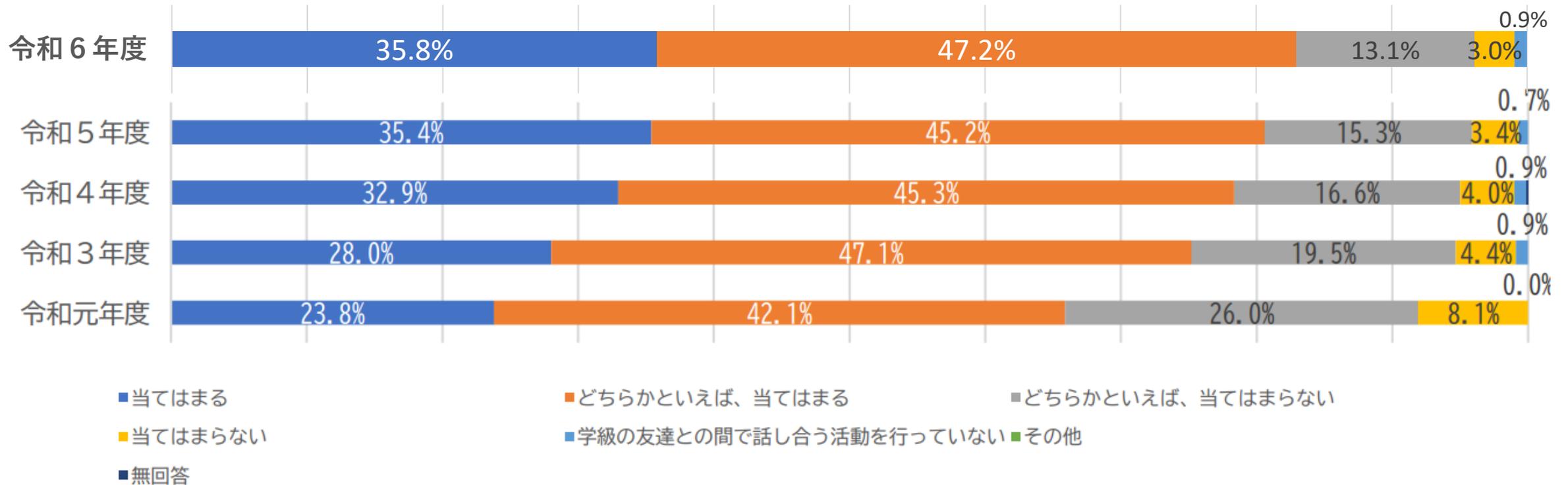


全国学力・学習状況調査（小学校）

学力向上推進プラン目標1
の意識調査と酷似した質問

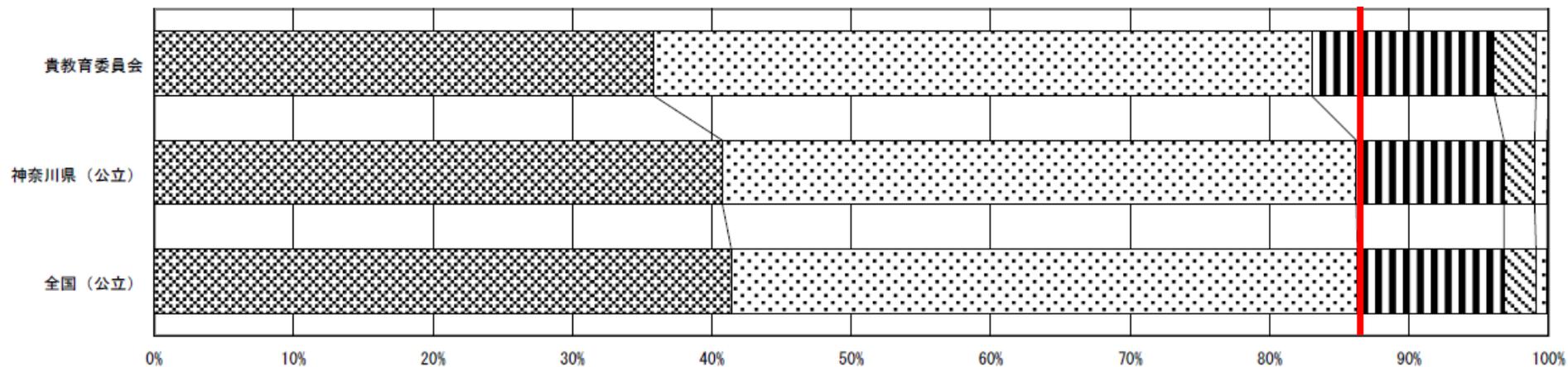
質問紙 36 学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか（小学6年生）

※令和6年度は質問（33）…自分の考えを深めたり、**新たな考え方に気付いたり**することができていますか



質問番号	質問事項											
(33)	学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気付いたりすることができていますか											
選択肢	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	その他	無回答
貴教育委員会	35.8	47.2	13.1	3.0	0.9						0.0	0.0
神奈川県（公立）	40.8	45.5	10.6	2.2	0.9						0.0	0.1
全国（公立）	41.4	44.9	10.5	2.3	0.8						0.0	0.1

1. 当てはまる 2. どちらかといえば、当てはまる 3. どちらかといえば、当てはまらない 4. 当てはまらない 5. 学級の友達との間で話し合う活動を行っていない その他 無回答



令和6年度

全国学力・学習状況調査（小6・中3）の分析結果

～ 教科に関する調査結果と質問調査結果のクロス集計 ～

目次

1. 「横須賀市学力向上推進プラン」に係る分析

目標1 学び合う集団の育成を図る

- (1) 主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善・・・・・・・・・・ 2～9
- (2) 自己肯定感に関する状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9～10

目標2 粘り強く学ぶ力の育成を図る

- (3) 記述式の設問に関する解答状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11～14
- (4) 記述式の設問に関する正答率と無解答率（市、国、県比較）・・・・ 15

2. 「ICT機器を活用した学習状況」に係る分析・・・・・・・・・・ 16～19

3. 今後の取組・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20

1. 「横須賀市学力向上推進プラン」に係る分析

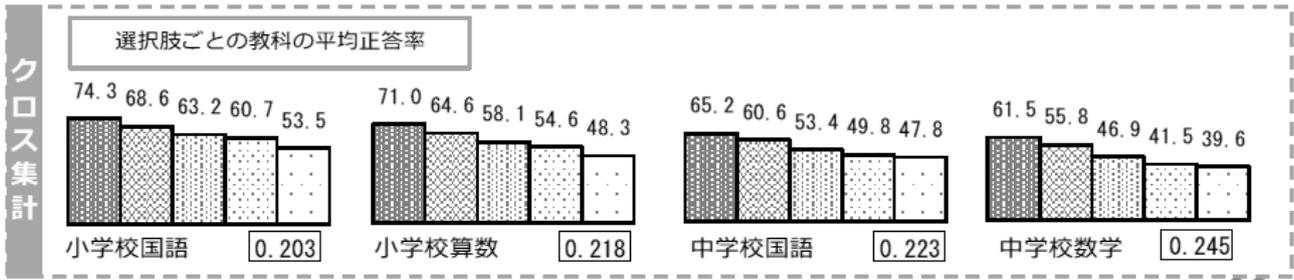
目標1 学び合う集団の育成を図る

(1) 主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善

① [自分の考えを公表する機会では、自分の考えがうまく伝わるように、資料や文章、話の組立などを工夫して発表していましたか] × [各教科平均正答率]

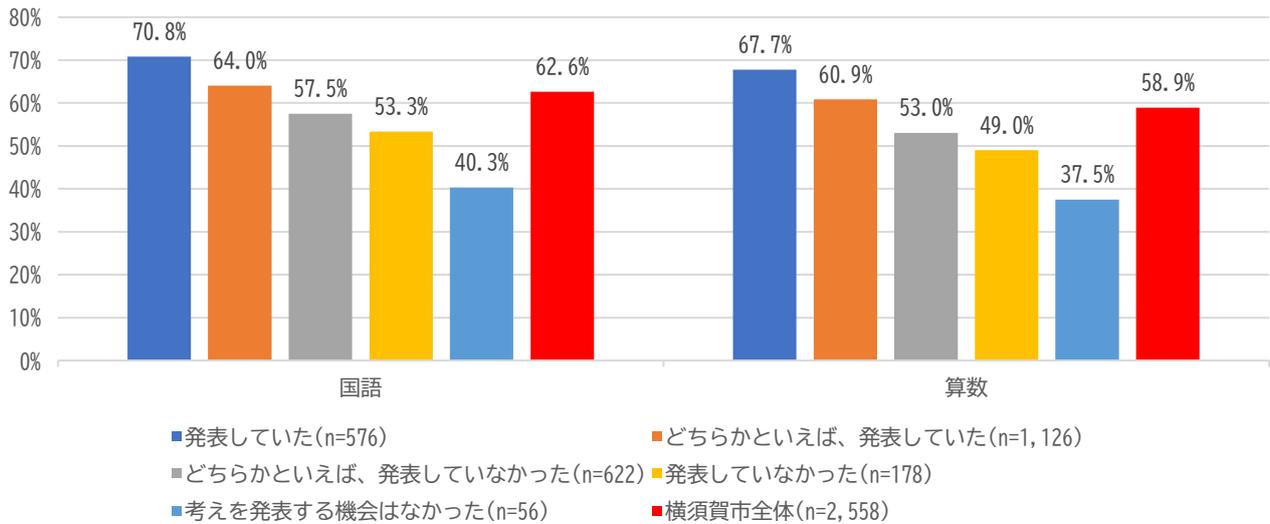
【全国の結果】

発表していた
 どちらかといえば、発表していた
 どちらかといえば、発表していなかった
 発表していなかった
 考えを公表する機会はなかった

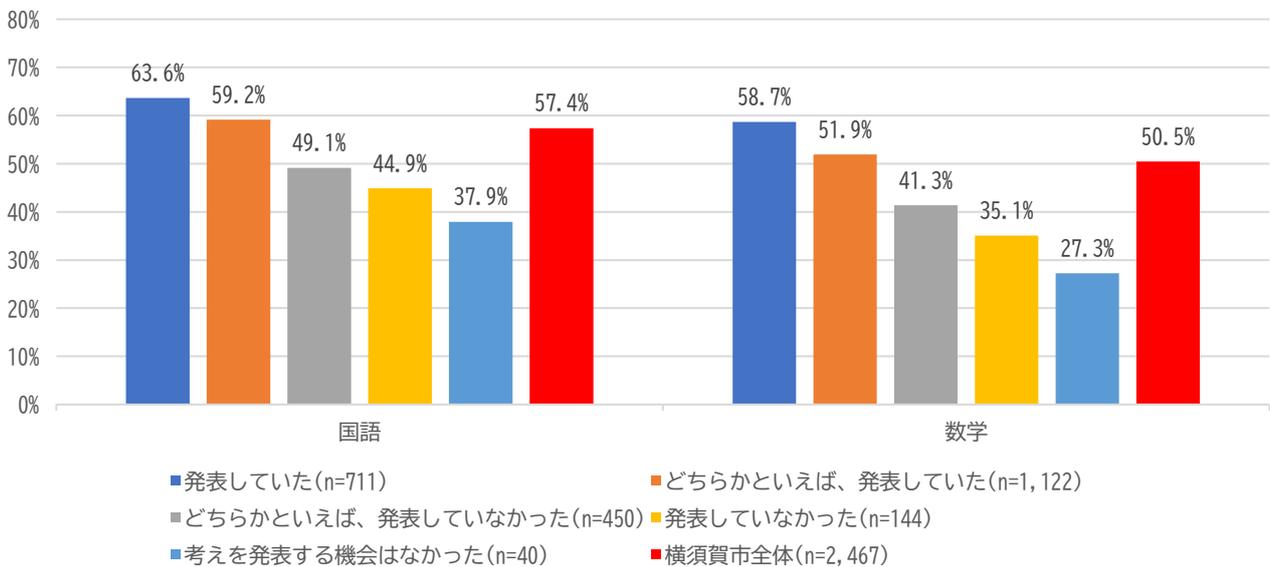


【横須賀市の結果】

資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表していたか×平均正答率（小6）



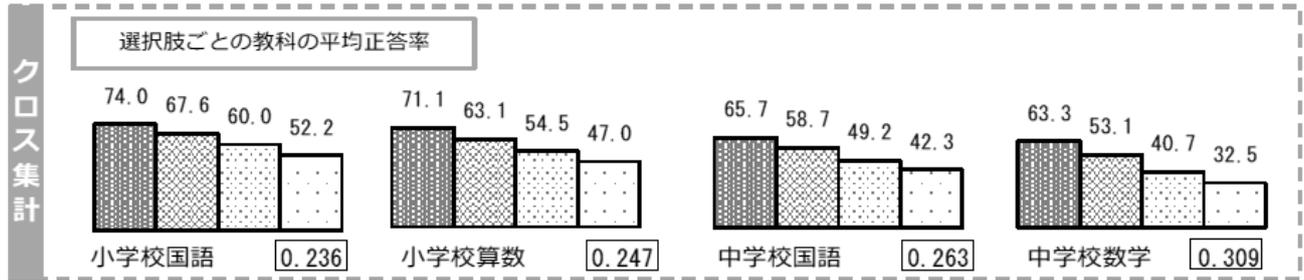
資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表していたか×平均正答率（中3）



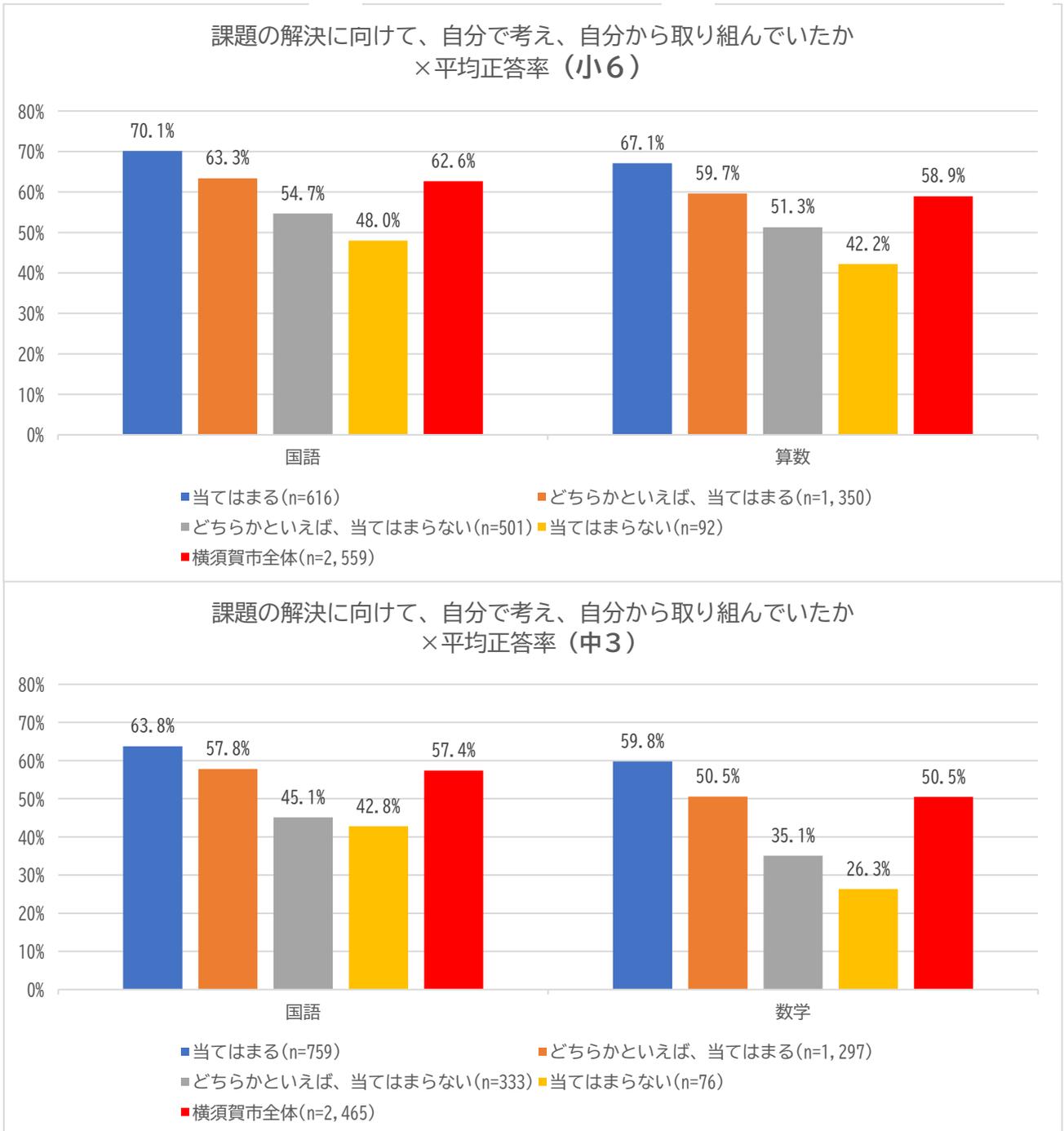
② [課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか] × [各教科平均正答率]

【全国の結果】

■ 当てはまる ■ どちらかといえば、当てはまる ■ どちらかといえば、当てはまらない ■ 当てはまらない



【横須賀市の結果】

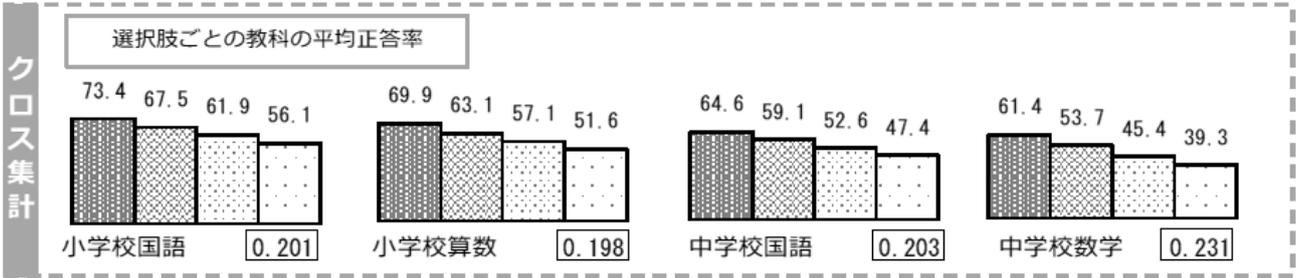


③ [各教科などで学んだことを生かしながら、自分の考えをまとめる活動を行っていましたか]

× [各教科平均正答率]

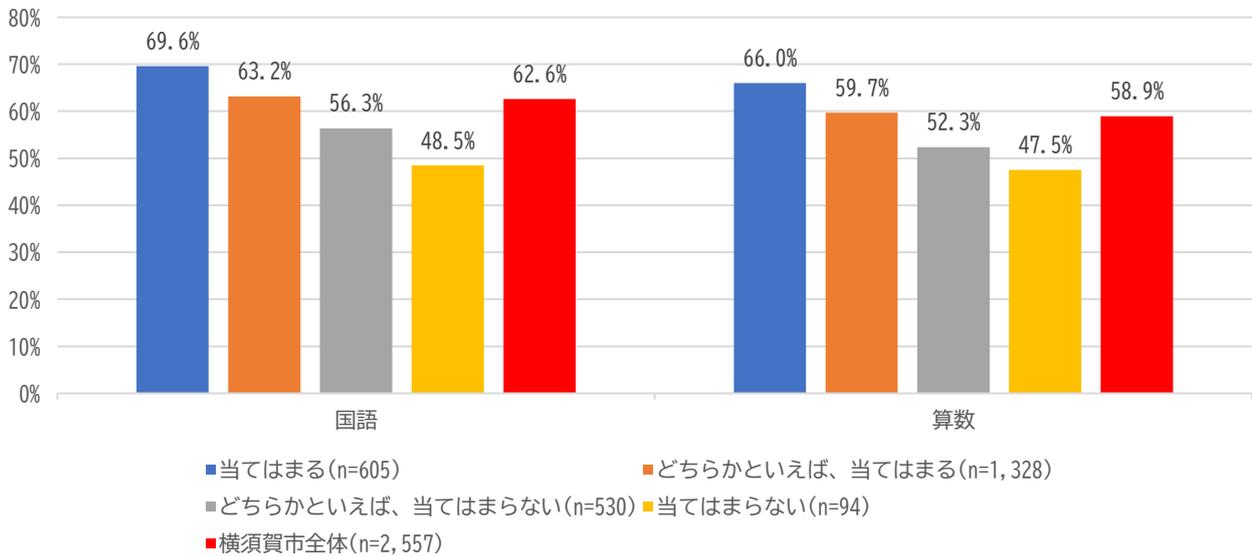
【全国の結果】

■ 当てはまる ■ どちらかといえば、当てはまる ■ どちらかといえば、当てはまらない □ 当てはまらない

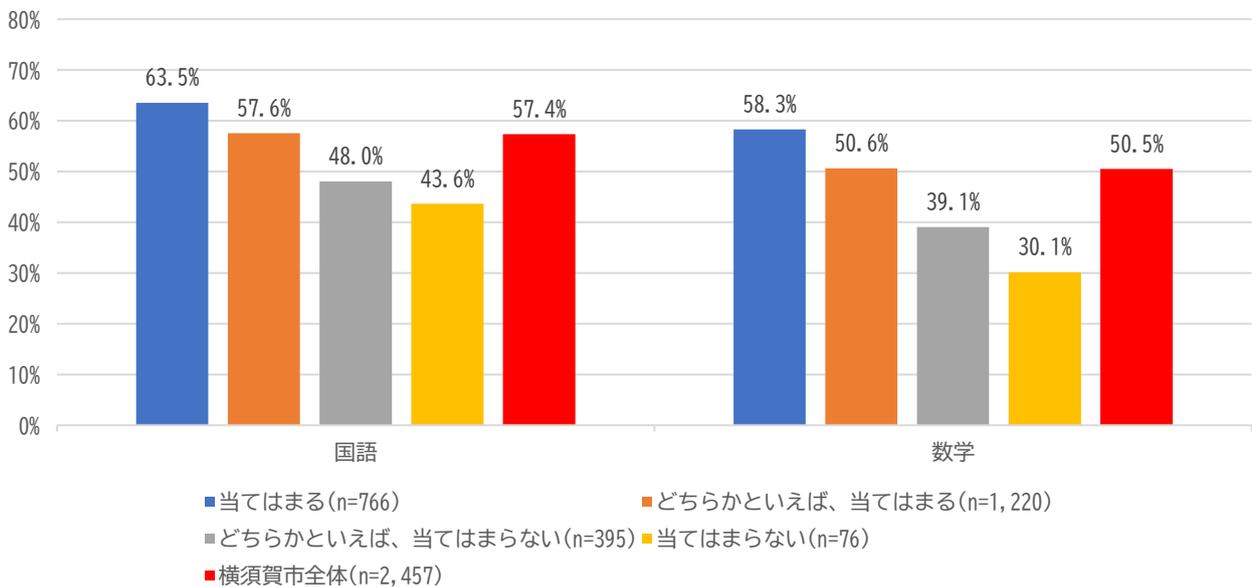


【横須賀市の結果】

各教科などで学んだことを生かしながら、自分の考えをまとめる活動を行っていたか
× 平均正答率 (小6)

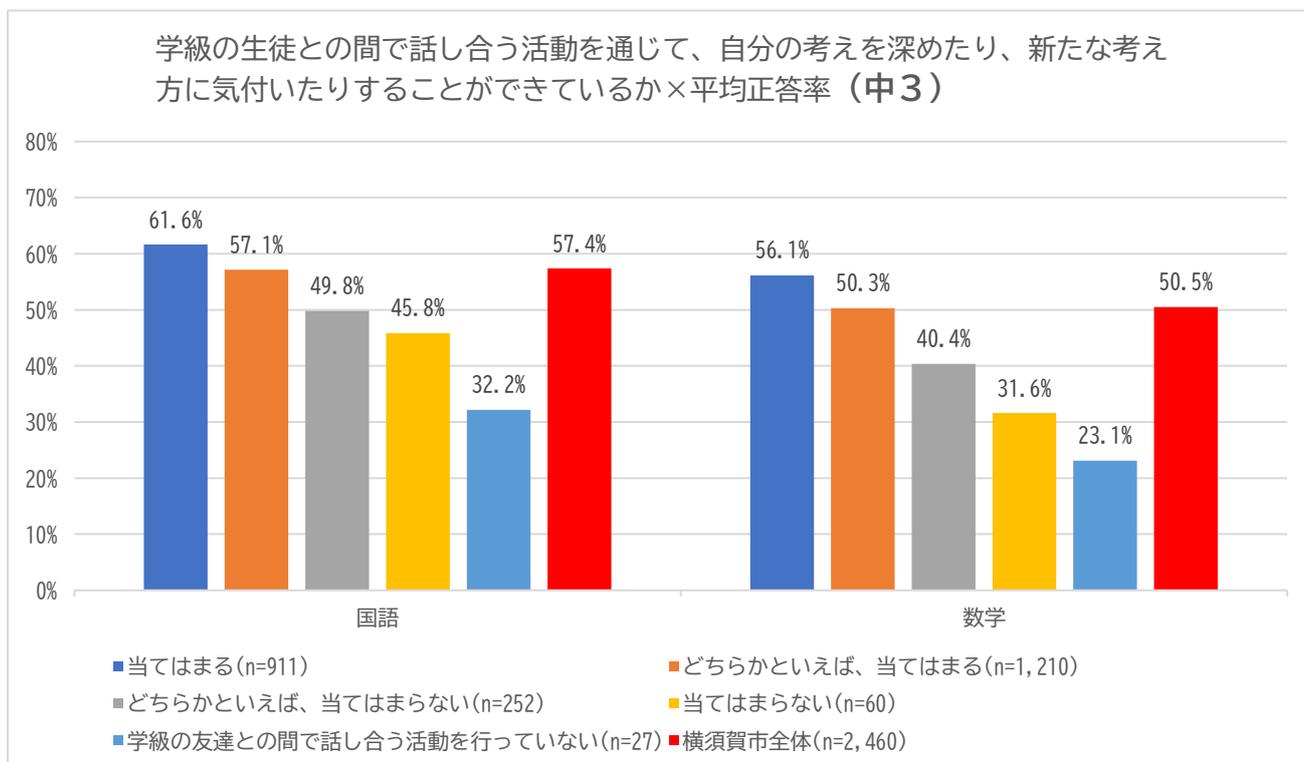
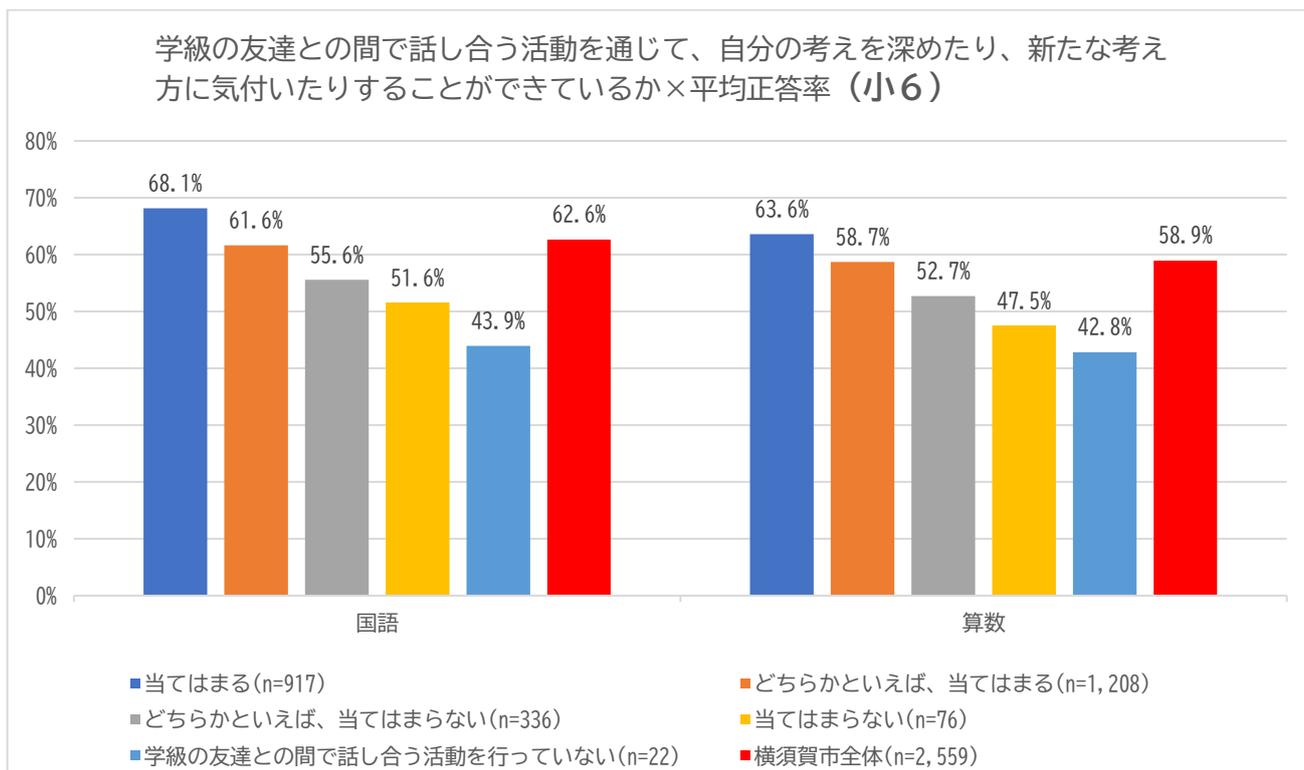


各教科などで学んだことを生かしながら、自分の考えをまとめる活動を行っていたか
× 平均正答率 (中3)



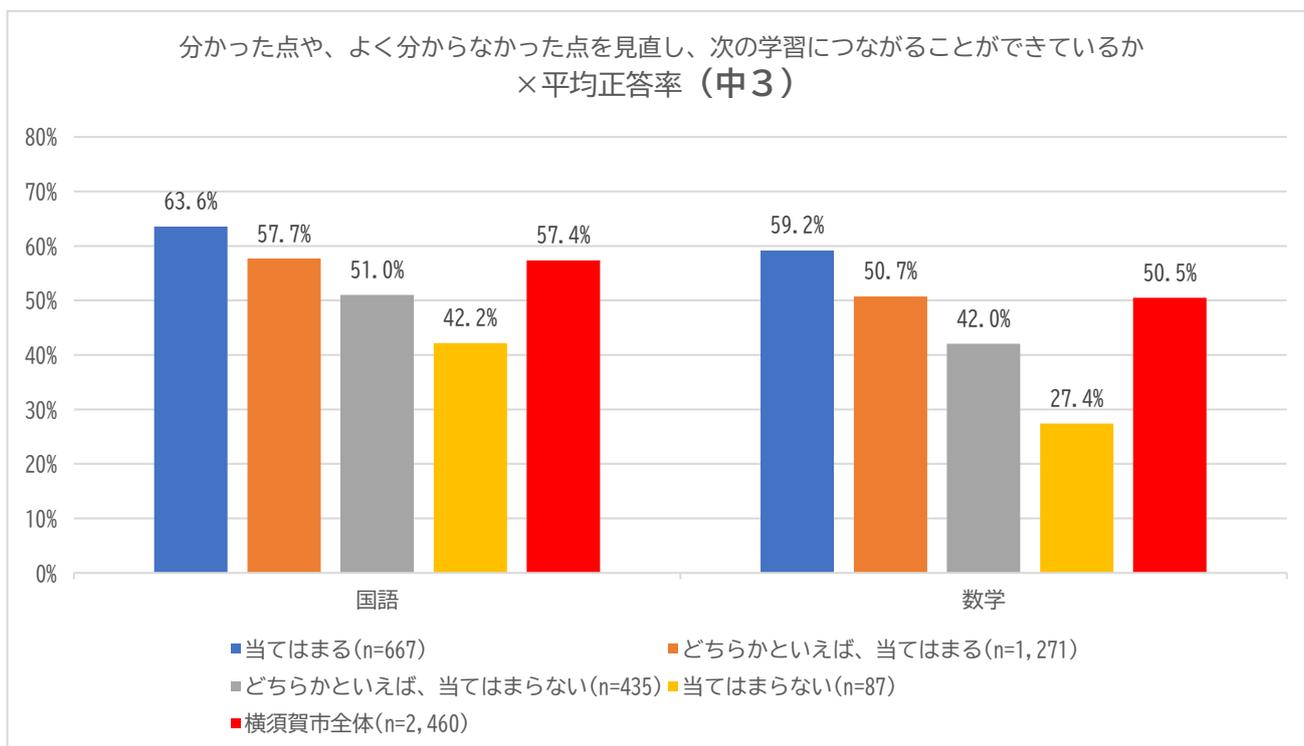
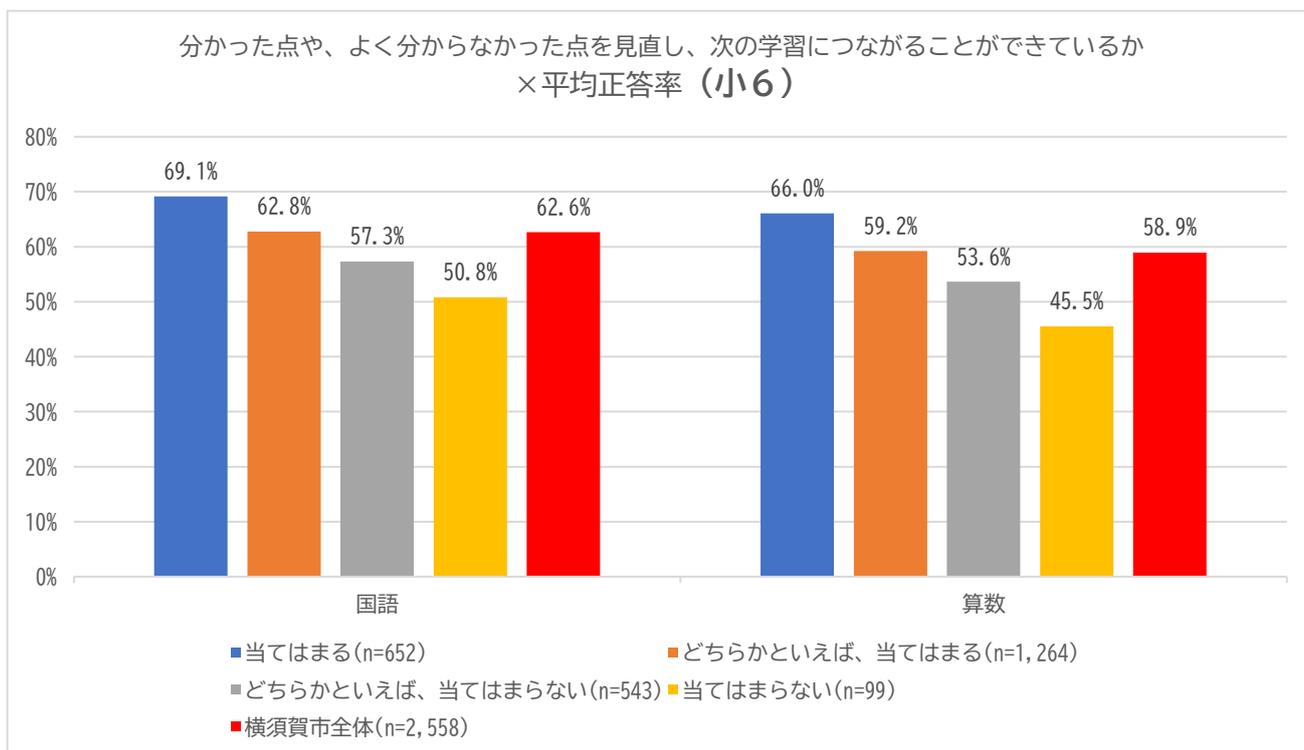
④[学級の友達の間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気づいたりすることができていますか]×[各教科平均正答率]

【横須賀市の結果】



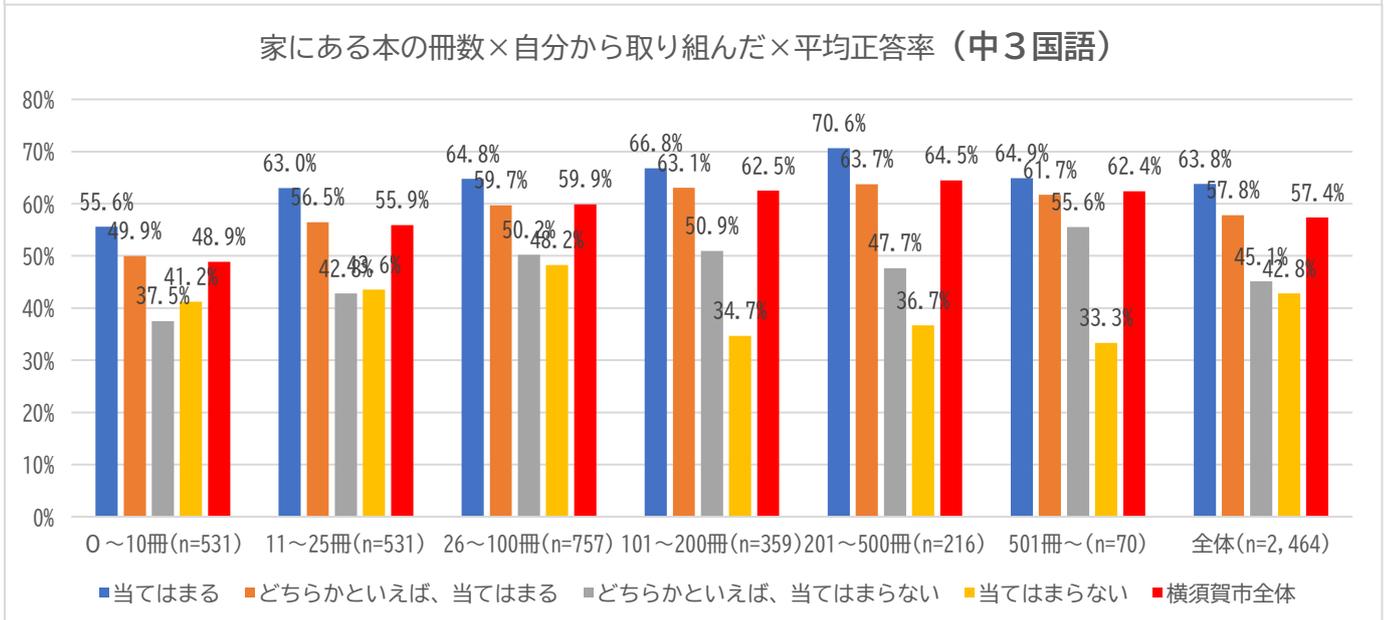
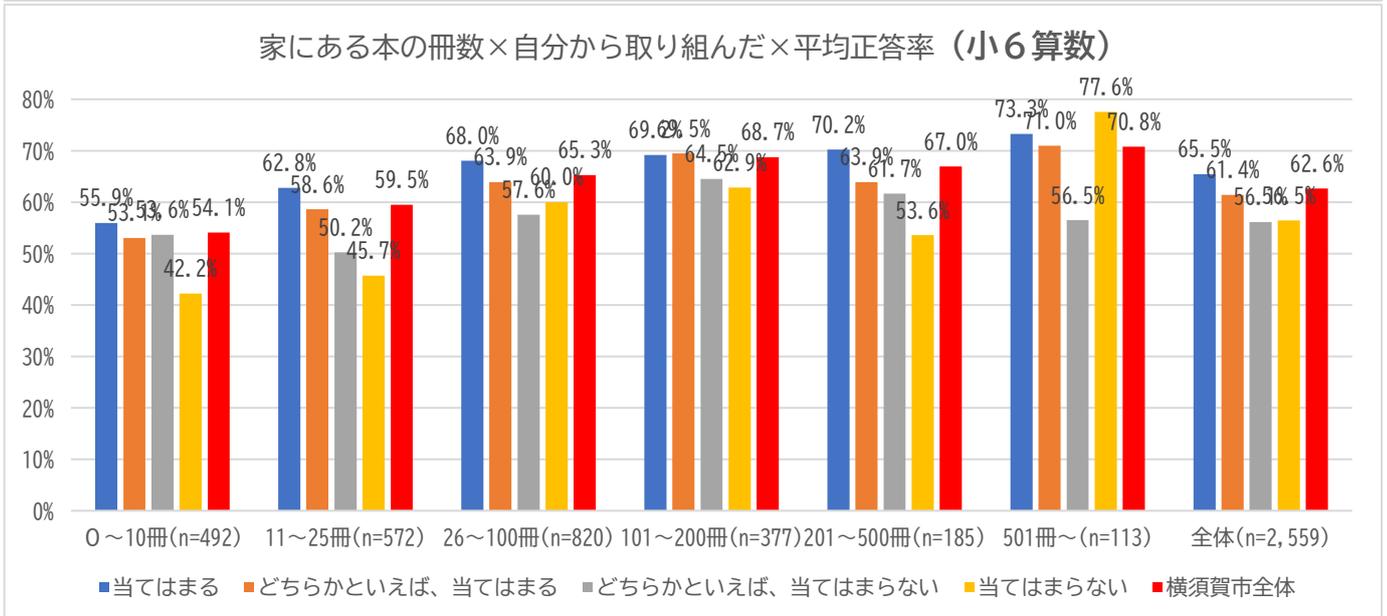
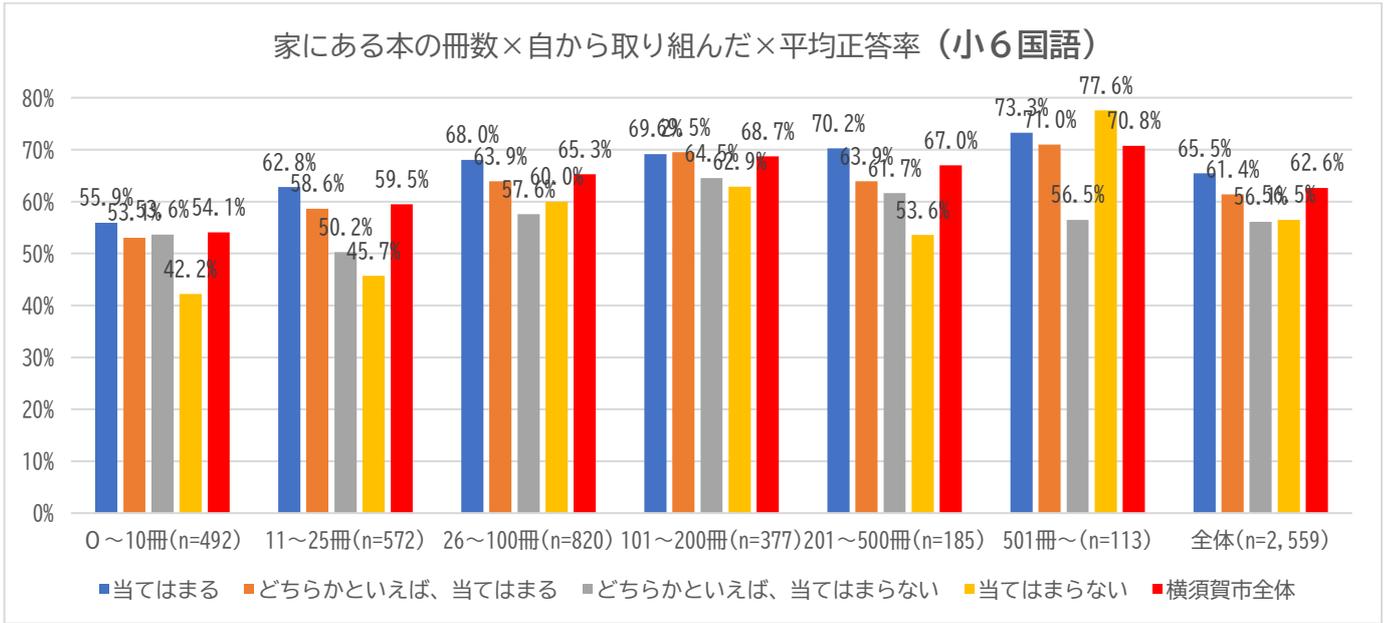
⑤ [学習した内容について、分かった点や、よく分からなかった点を見直し、次の学習につなげることができる] × [各教科平均正答率]

【横須賀市の結果】

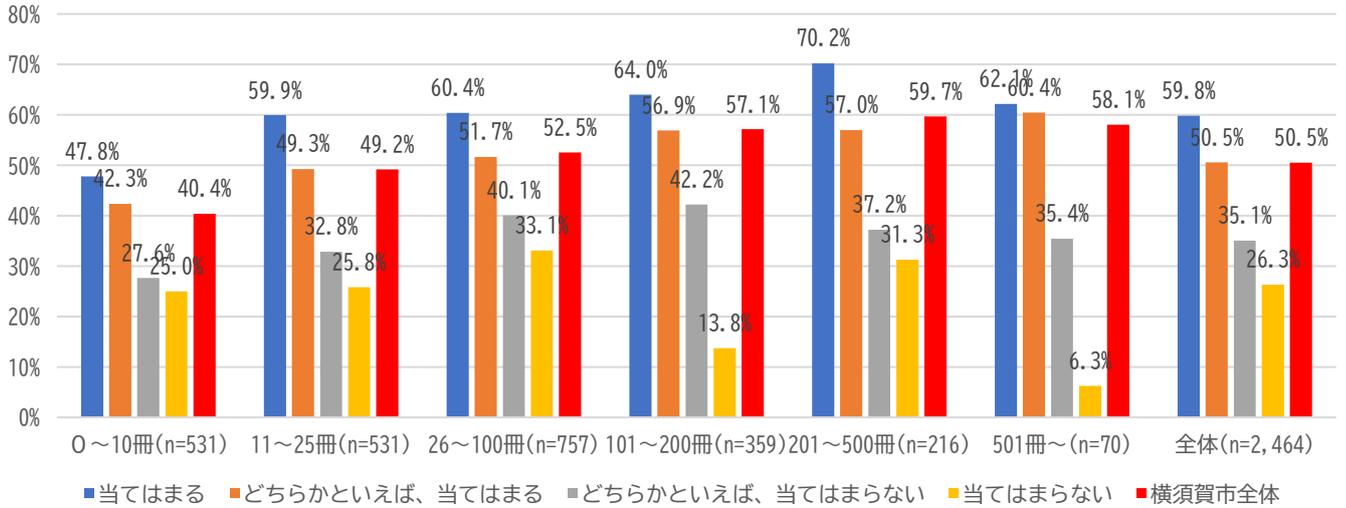


⑥ [家にある本の冊数] × [課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んだ] × [各教科平均正答率]

【横須賀市の結果】



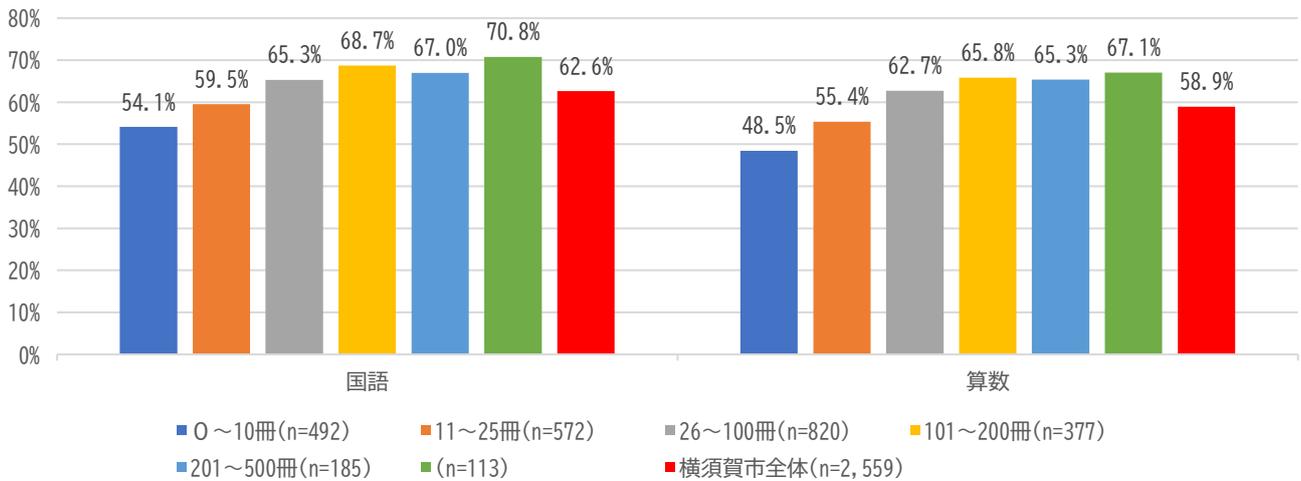
家にある本の冊数×自分から取り組んだ×平均正答率（中3数学）



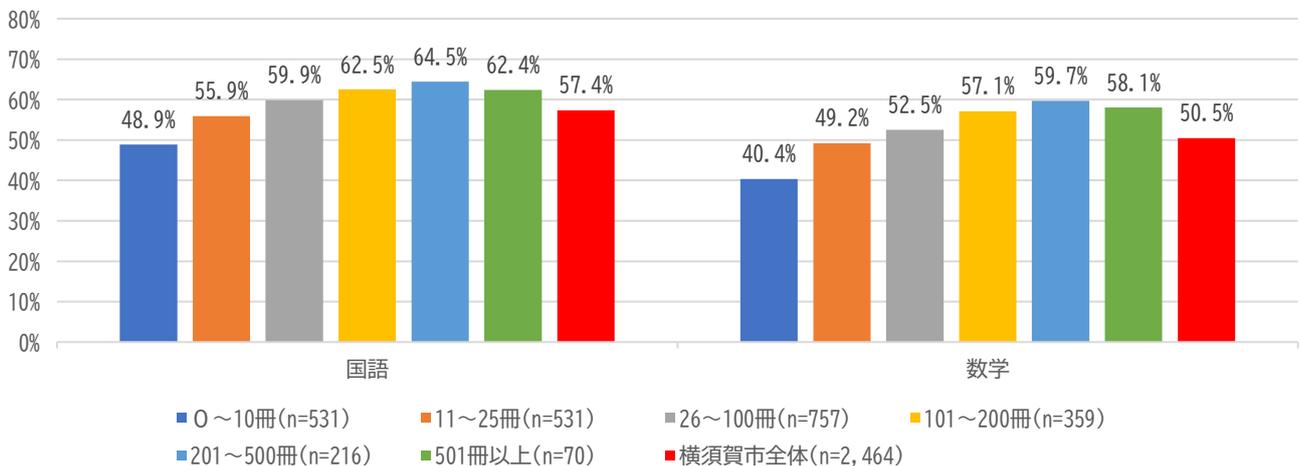
(参考資料) [家にある本の冊数] × [各教科平均正答率]

【横須賀市の結果】

家にある本の冊数×平均正答率（小6）



家にある本の冊数×平均正答率（中3）



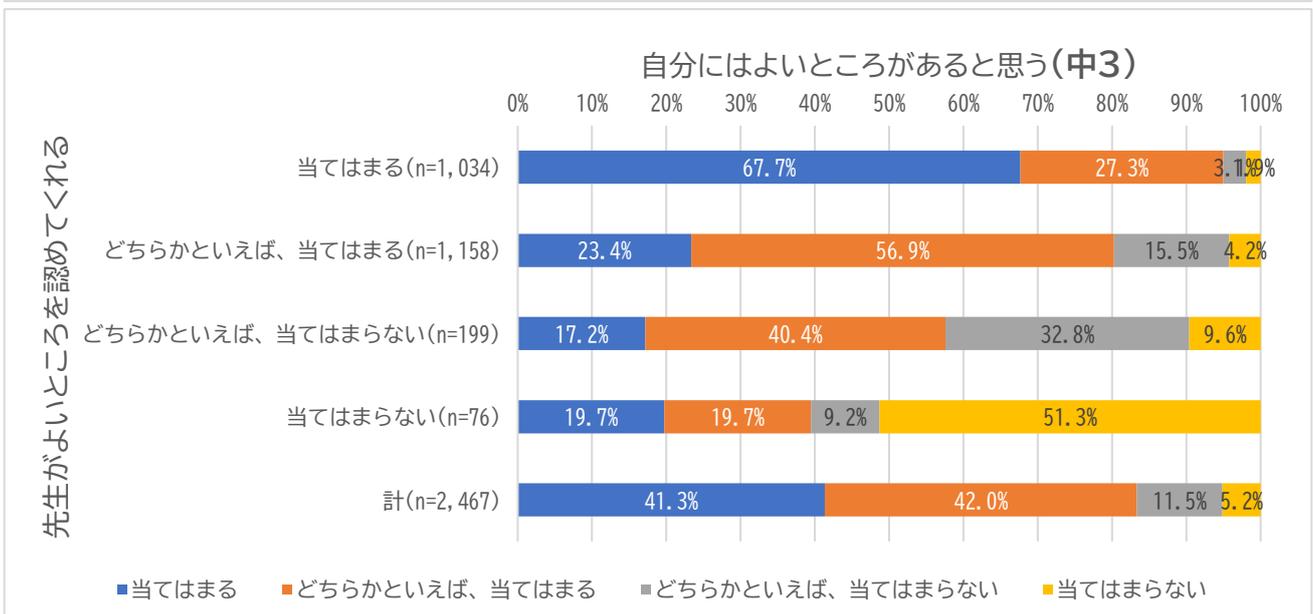
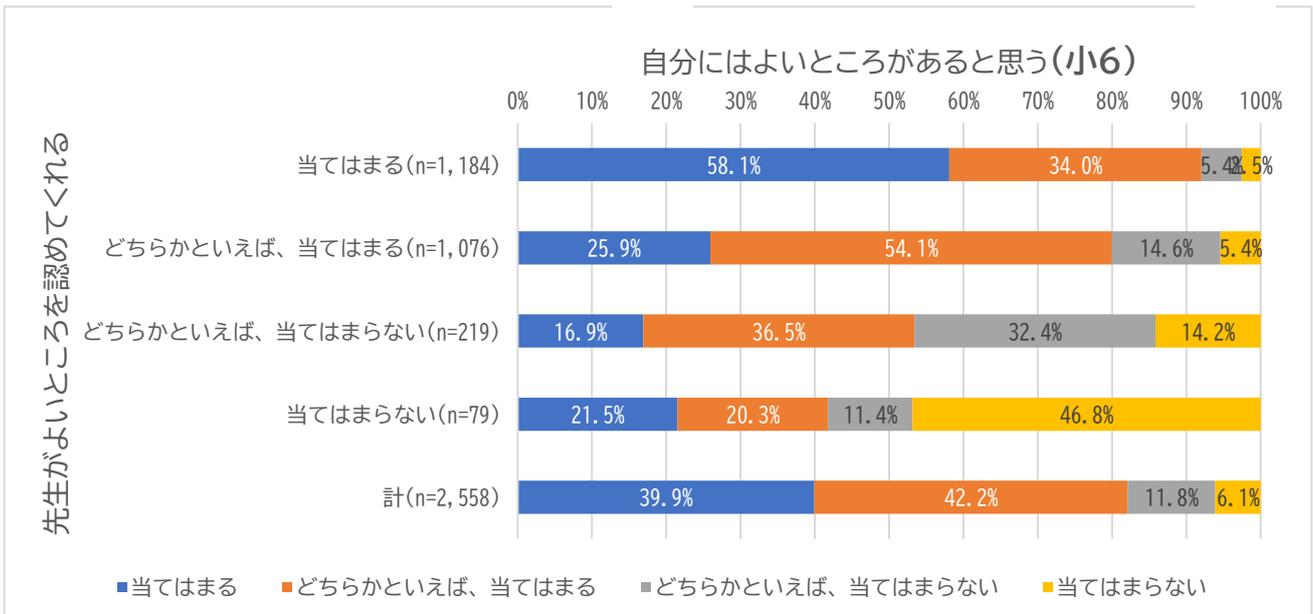
分析

- 「主体的・対話的で深い学び」に取り組んでいると自覚している児童生徒の方が、平均正答率が高い傾向が見られる。また、小学校より中学校の方が、よりその傾向が見られる。
- 家にある本の冊数が多いほど、各教科の平均正答率が高い傾向にあるが、「主体的・対話的で深い学び」に取り組んでいると自覚している児童生徒は、家にある本の冊数が少ない状況であっても、各教科の平均正答率が高い傾向が見られる。また、小学校より中学校の方が、よりその傾向が見られる。

(2) 自己肯定感に関する状況

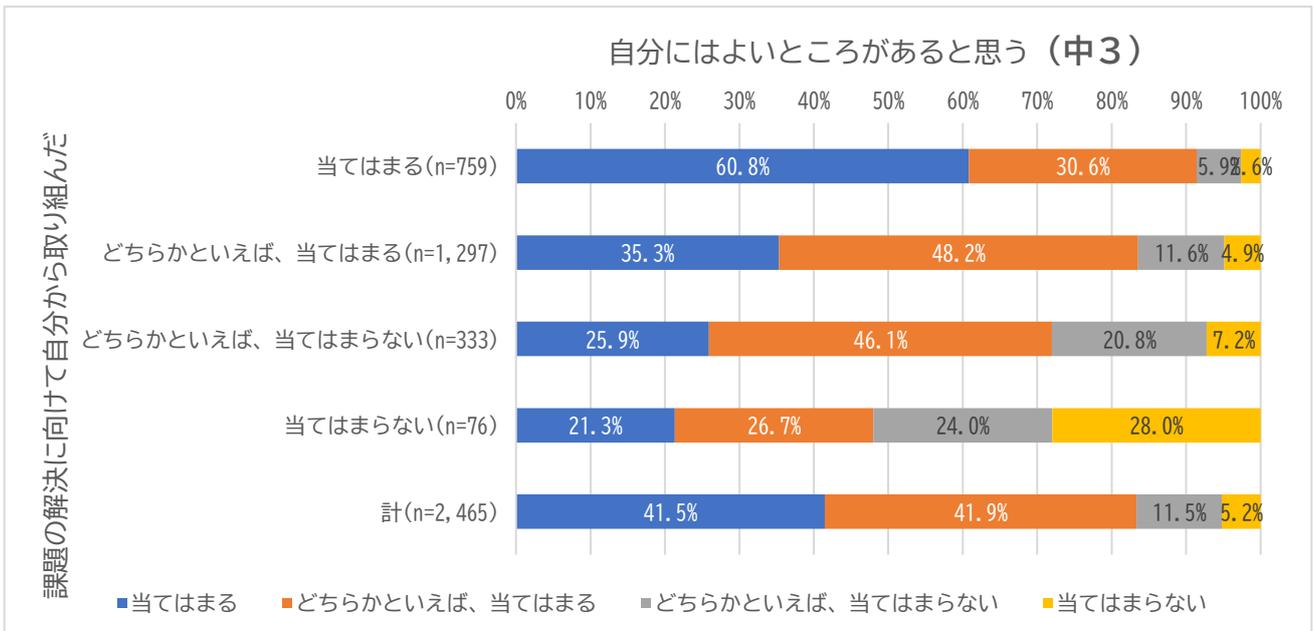
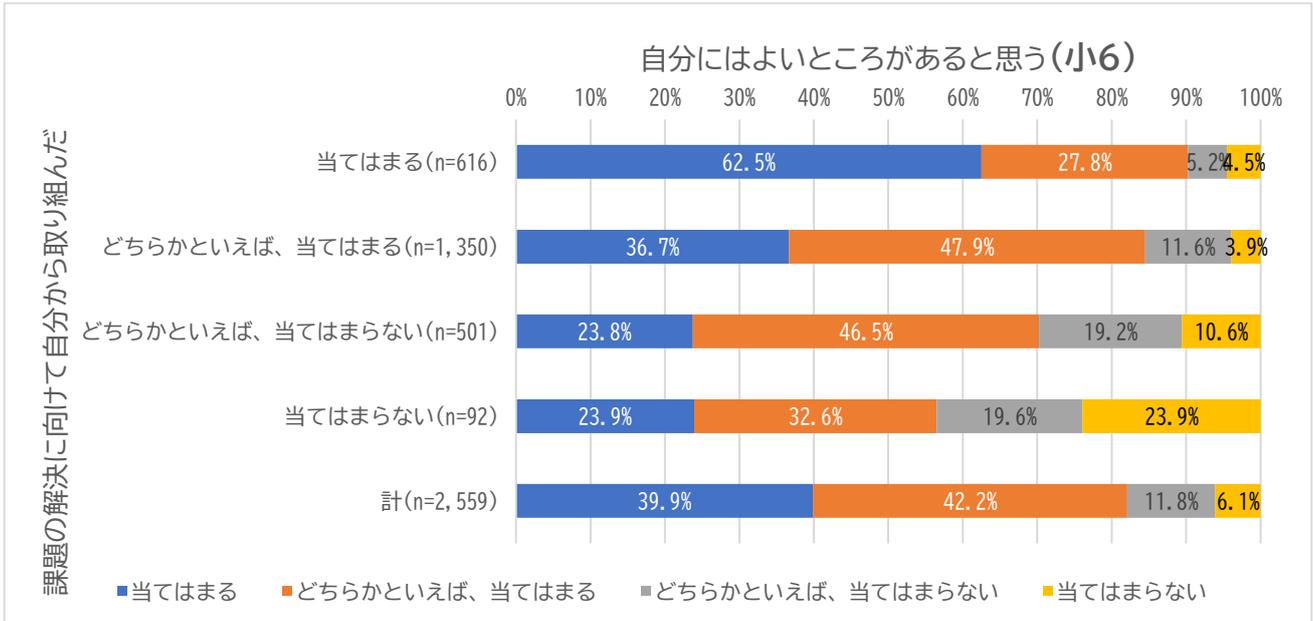
① [先生がよいところを認めてくれる]×[自分にはよいことがあると思う]

【横須賀市の結果】



②[課題の解決に向けて自分から取り組んだ]×[自分にはよいところがあると思う]

【横須賀市の結果】



分析

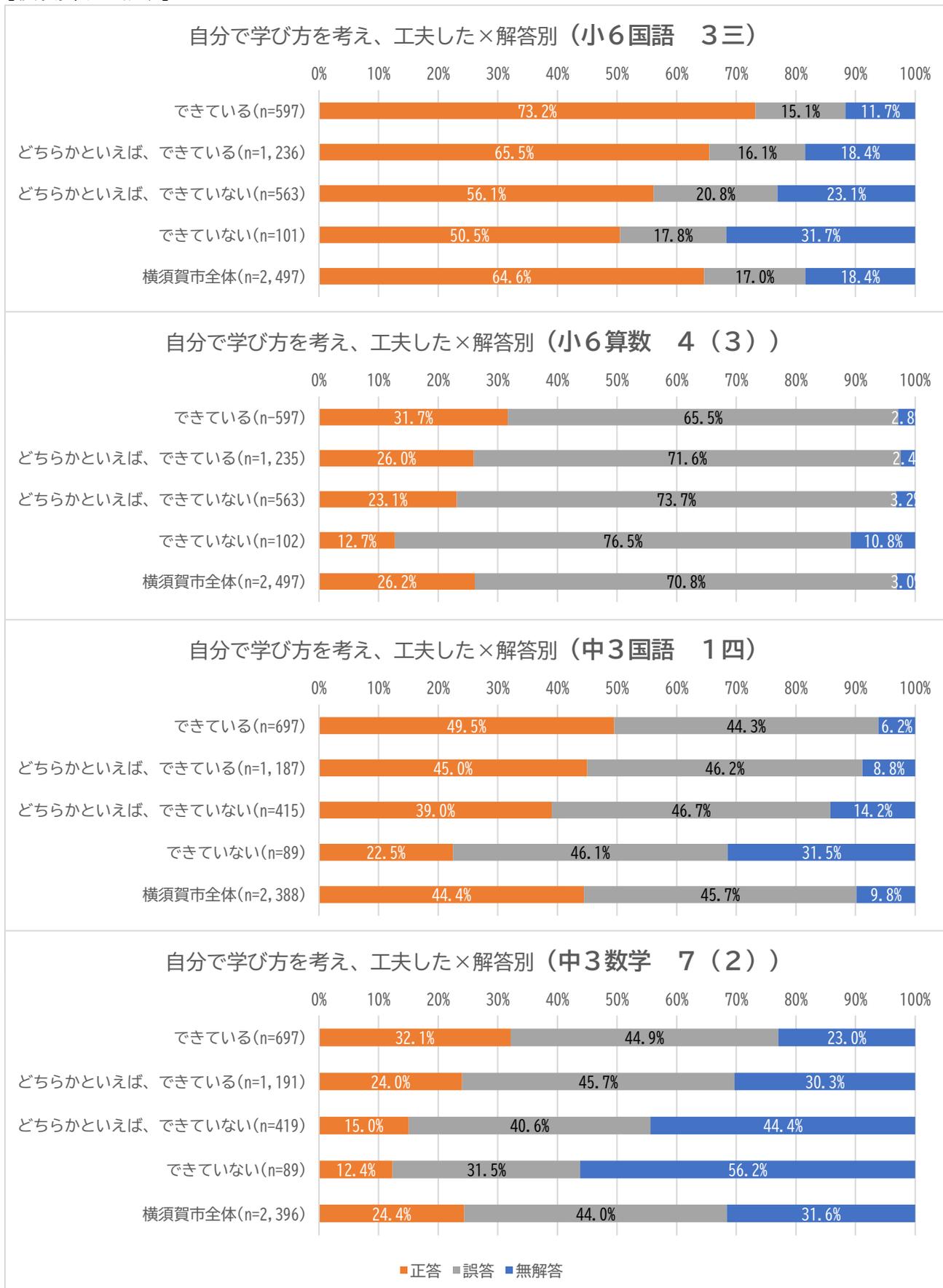
- 「先生がよいところを認めてくれる」と実感している児童生徒の方が、自己肯定感が高い傾向が見られる。
- 「課題解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいる」と自覚している児童生徒の方が、自己肯定感が高い傾向が見られる。

目標2 粘り強く学ぶ力の育成を図る

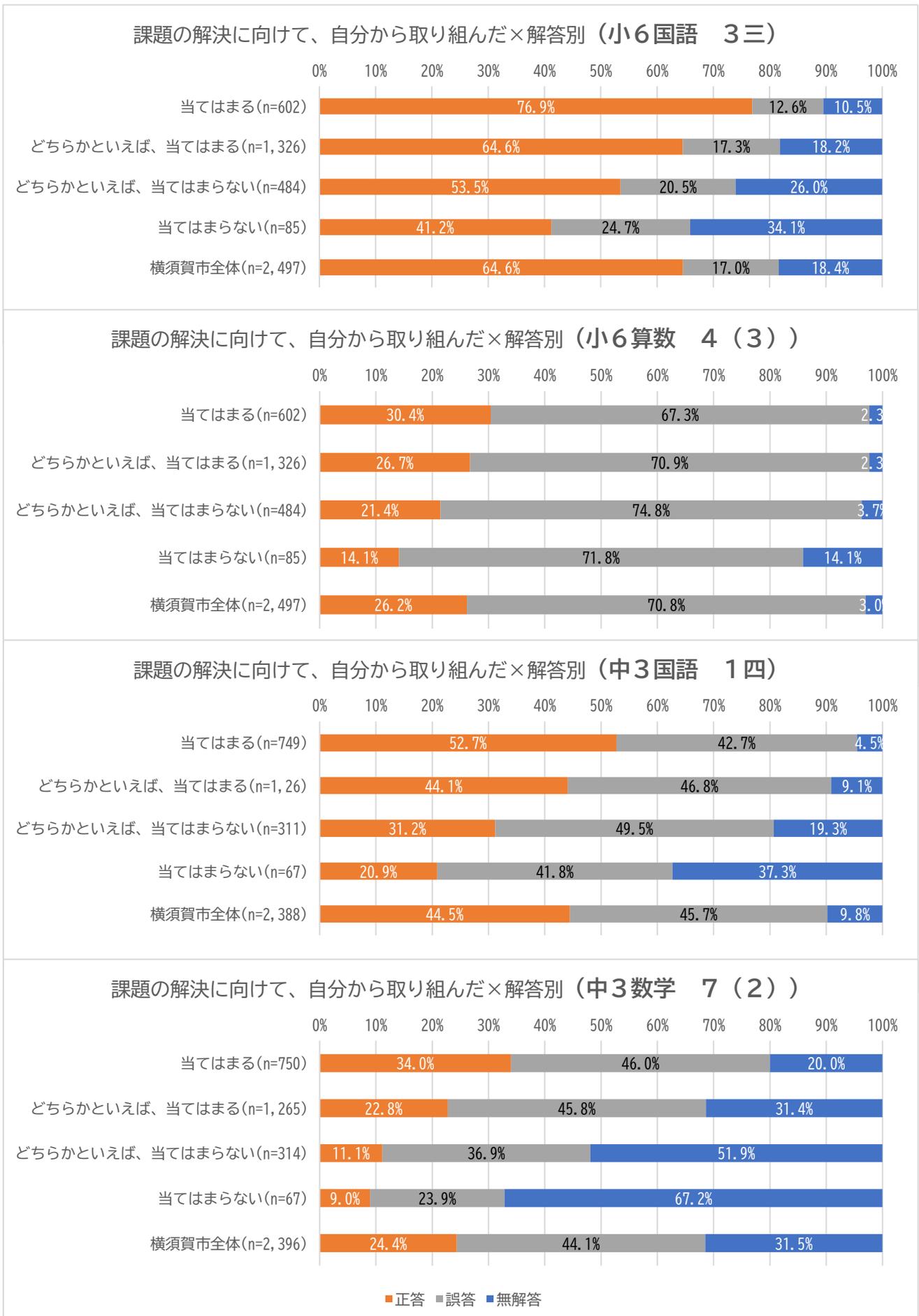
(3) 記述式の設問に関する解答状況

① [分からないことや詳しく知りたいことがあったときに、自分で学び方を考え、工夫することはできていますか] × [各教科記述問題の解答別]

【横須賀市の結果】



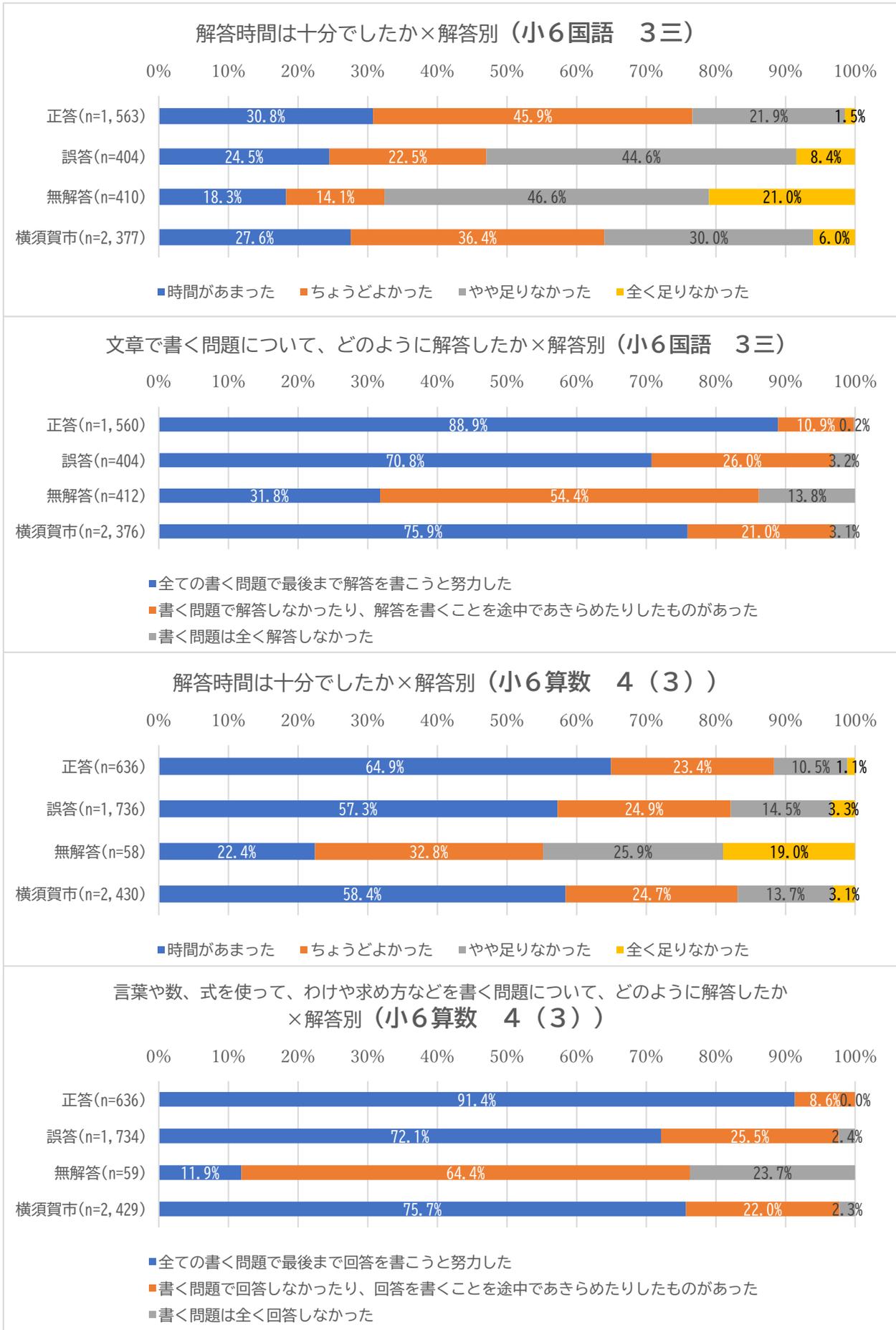
② [課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか] × [各教科記述問題の解答別]
【横須賀市の結果】



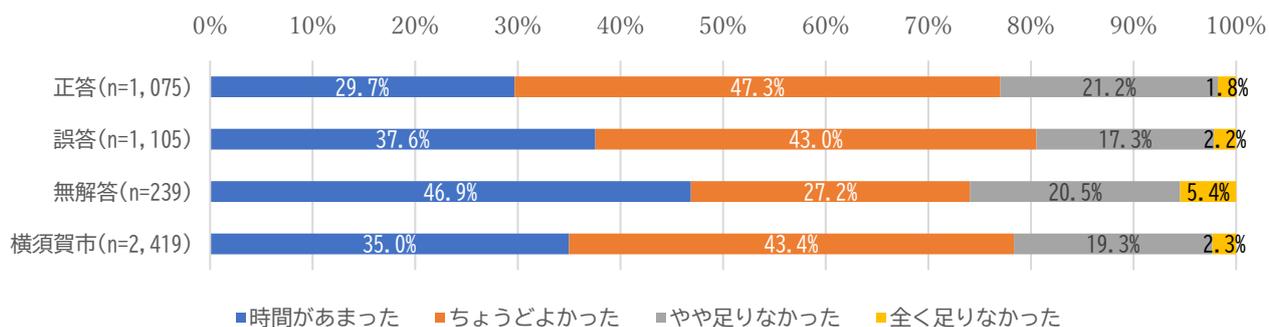
③ [解答時間は十分でしたか] × [各教科記述問題の解答別]

[どのように解答したか] × [各教科記述問題の解答別]

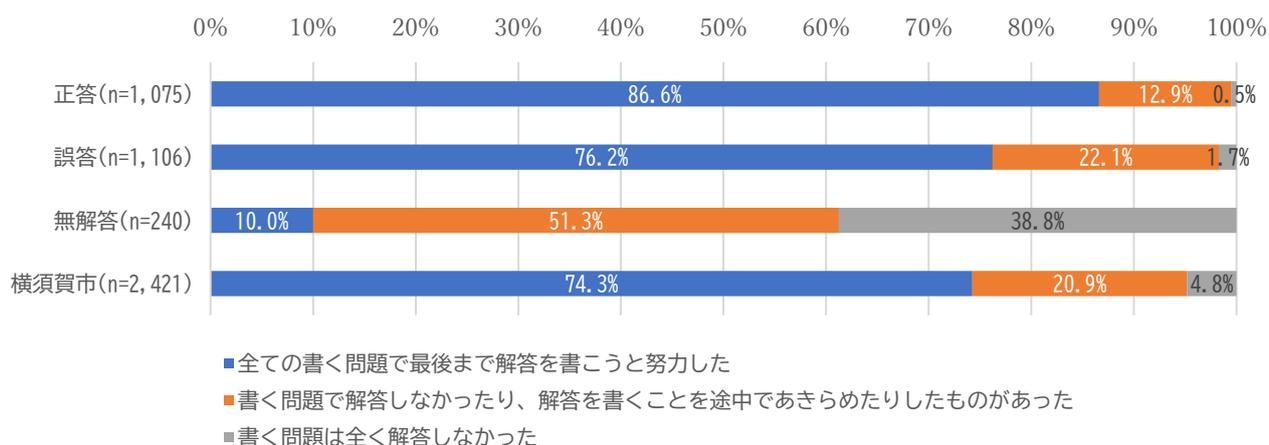
【横須賀市の結果】



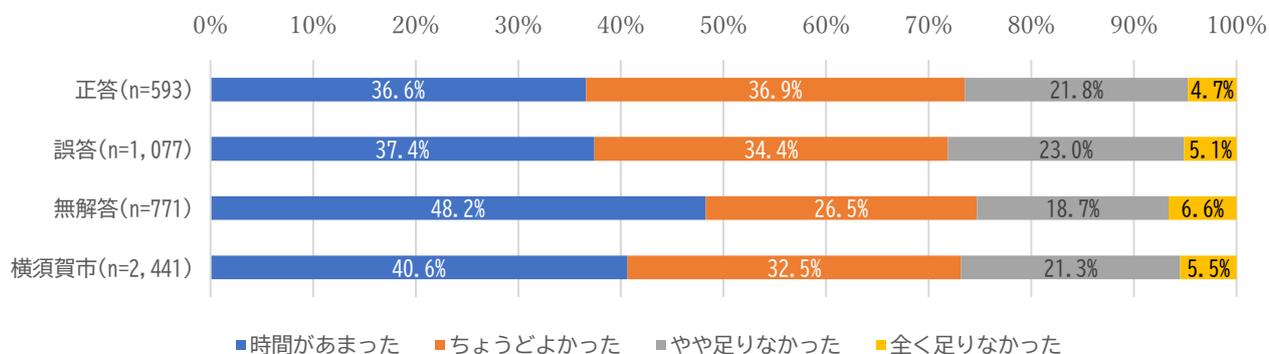
解答時間は十分でしたか×解答別（中3国語 1四）



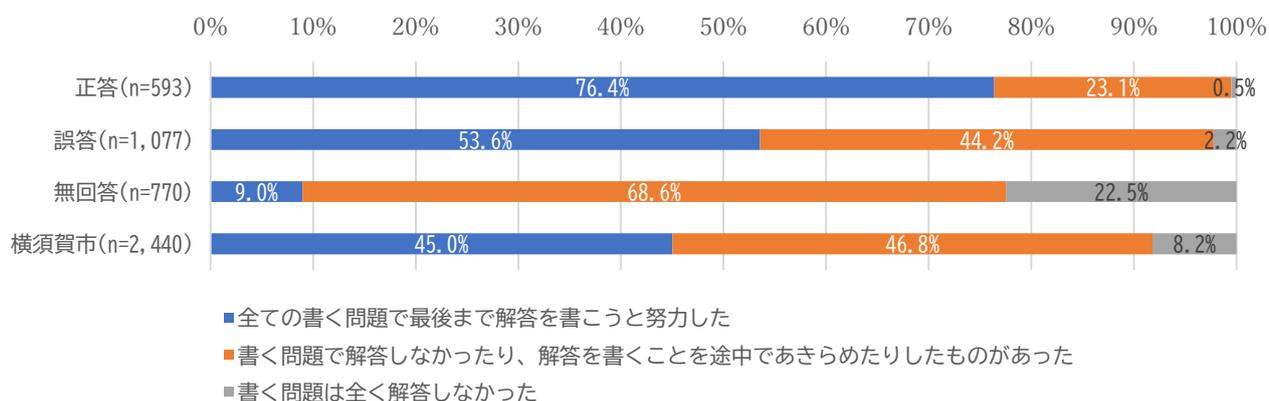
文章で書く問題について、どのように解答したか×解答別（中3国語 1四）



解答時間は十分でしたか×解答別（中3数学 7（2））



言葉や数、式を使って説明する問題について、どのように解答したか×解答別（中3数学 7（2））



(参考) 記述式の設問に関する正答率と無解答率 (市、国、県比較)

学年・ 教科	問題 番号	正答率			無解答率			教科全体正答率		
		市	県 (公立)	全国 (公立)	市	県 (公立)	全国 (公立)	市 (公立)	県 公立)	全国 (公立)
小6 国語	2 二	52.9%	55.2%	56.6%	6.7%	6.2%	4.9%	63%	67%	67.7%
	3 三	64.5%	68.5%	72.6%	18.6%	16.5%	12.6%			
小6 算数	2 (1)	52.6%	57.3%	56.9%	4.3%	3.8%	3.4%	59%	64%	63.4%
	3 (4)	66.5%	70.1%	72.0%	3.1%	2.3%	1.8%			
	4 (3)	25.8%	33.0%	31.0%	3.1%	2.8%	2.4%			
	5 (3)	38.5%	44.0%	44.0%	16.7%	14.5%	12.6%			
中3 国語	1 四	44.4%	44.0%	44.7%	10.0%	9.3%	9.9%	57%	59%	58.1%
	2 四	42.5%	44.7%	42.6%	7.5%	7.7%	8.4%			
	3 四	50.4%	50.9%	49.3%	14.3%	14.4%	15.0%			
中3 数学	6 (2)	34.4%	39.7%	35.8%	21.7%	20.7%	23.5%	51%	54%	52.5%
	6 (3)	38.2%	43.0%	41.8%	32.4%	28.9%	29.6%			
	7 (2)	24.1%	26.6%	26.0%	31.8%	29.6%	29.4%			
	8 (2)	16.9%	19.5%	17.1%	17.2%	16.5%	16.4%			
	9 (1)	23.5%	29.4%	25.8%	34.6%	31.4%	33.6%			

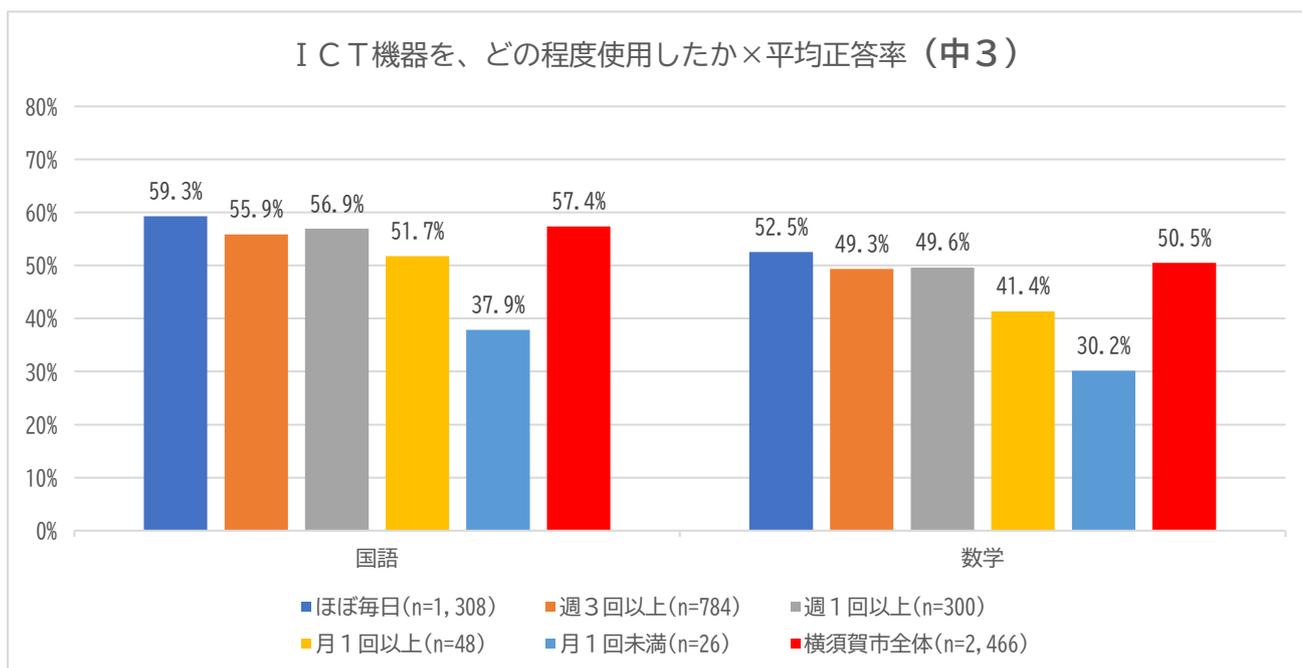
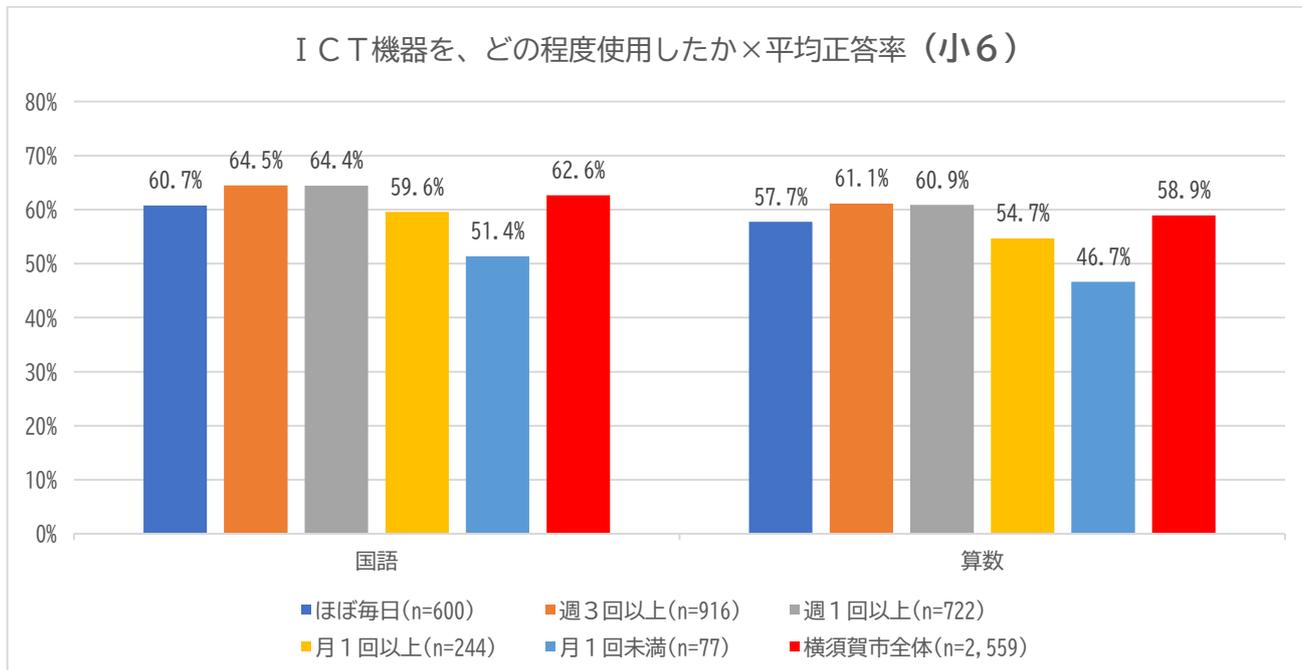
※全国正答率と比較して上回っている項目、また全国無解答率と比較して下回っているものに、色が付いている。

分析

- 「主体的・対話的で深い学び」に取り組んでいると自覚している児童生徒の方が、記述式の問題において無解答率が低く、正答率が高い傾向が見られる。
- 正答している児童生徒の方が、全ての書く問題で最後まで解答を書こうと努力している傾向が見られる。

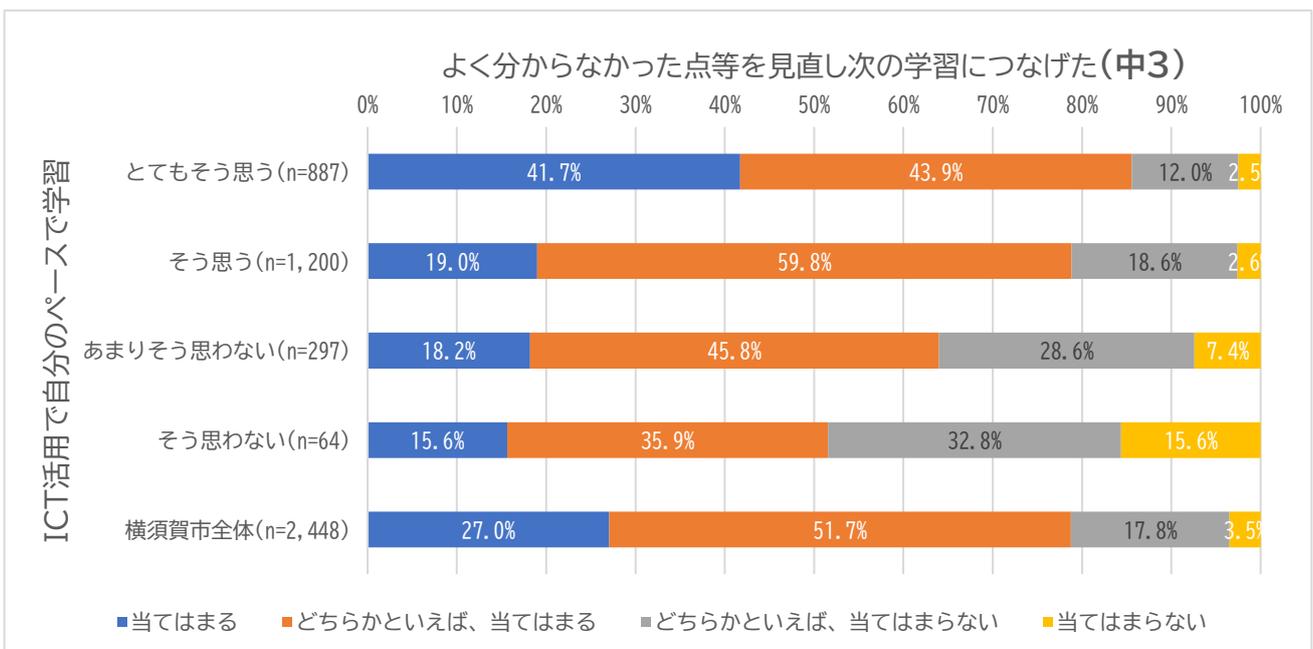
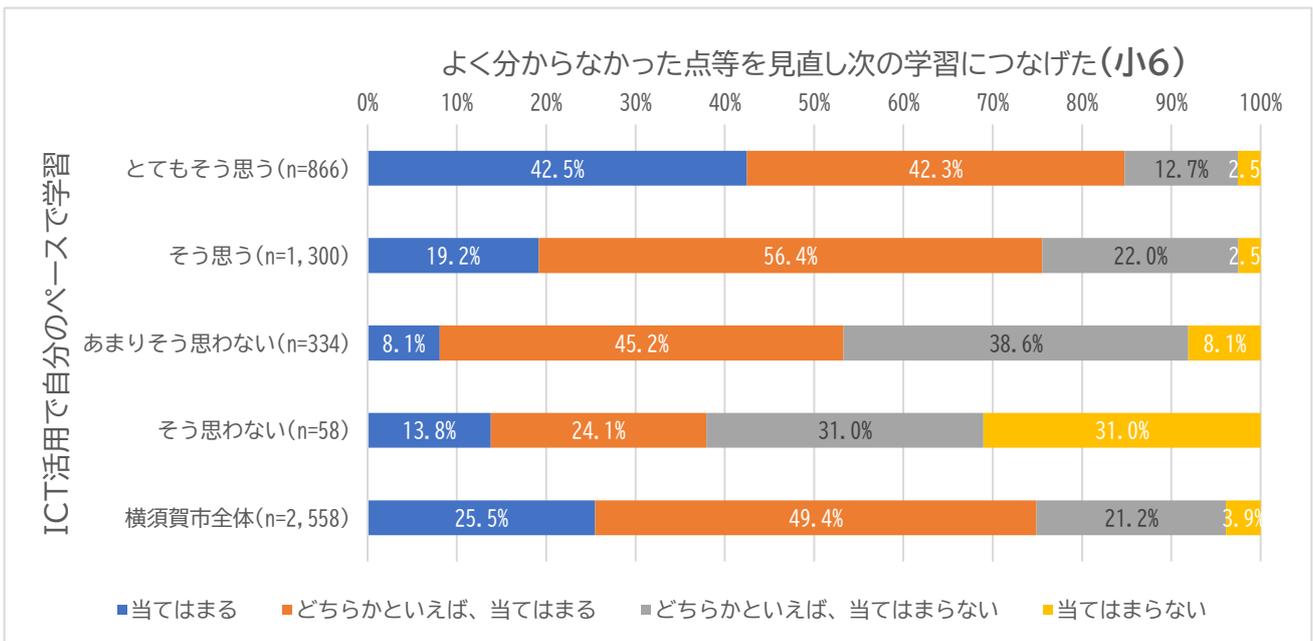
2. 「ICT 機器を活用した学習状況」に係る分析

① [授業で、PC・タブレットなどの ICT 機器を、どの程度使用しましたか] × [各教科平均正答率]
【横須賀市の結果】



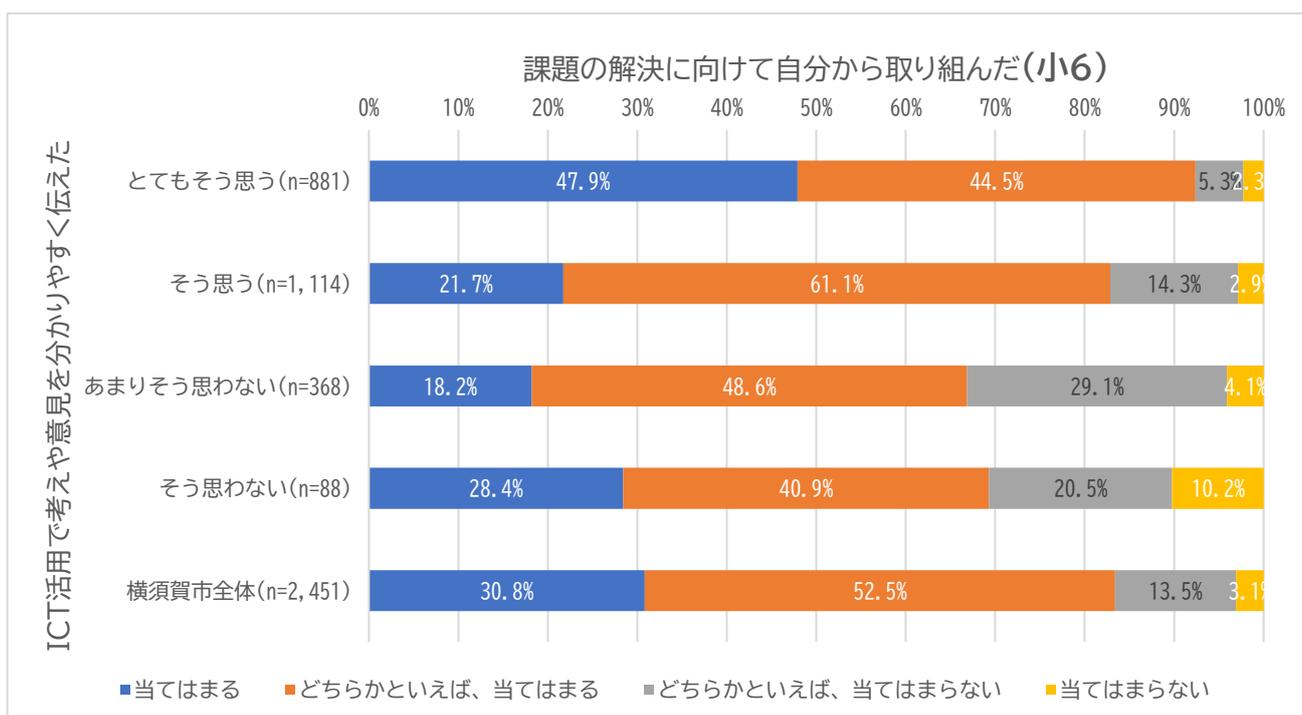
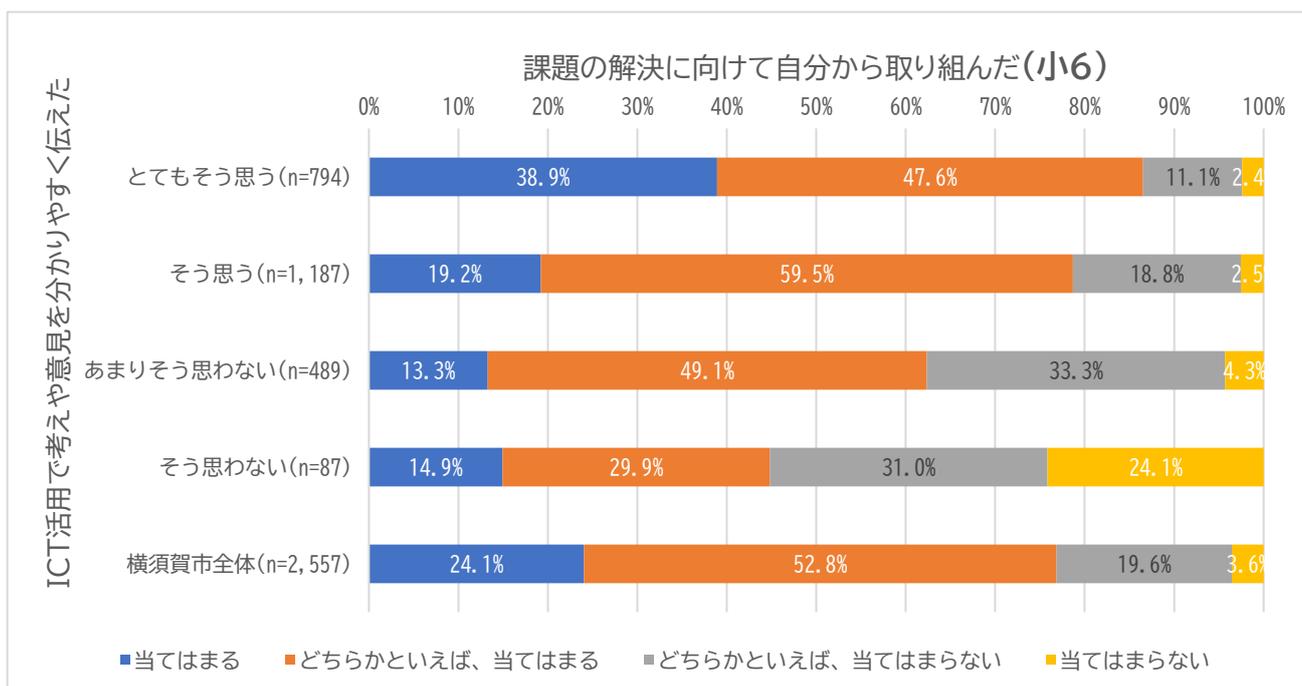
③[ICT活用で自分のペースで学習]×[よく分からなかった点等を見直し次の学習につなげた]

【横須賀市の結果】



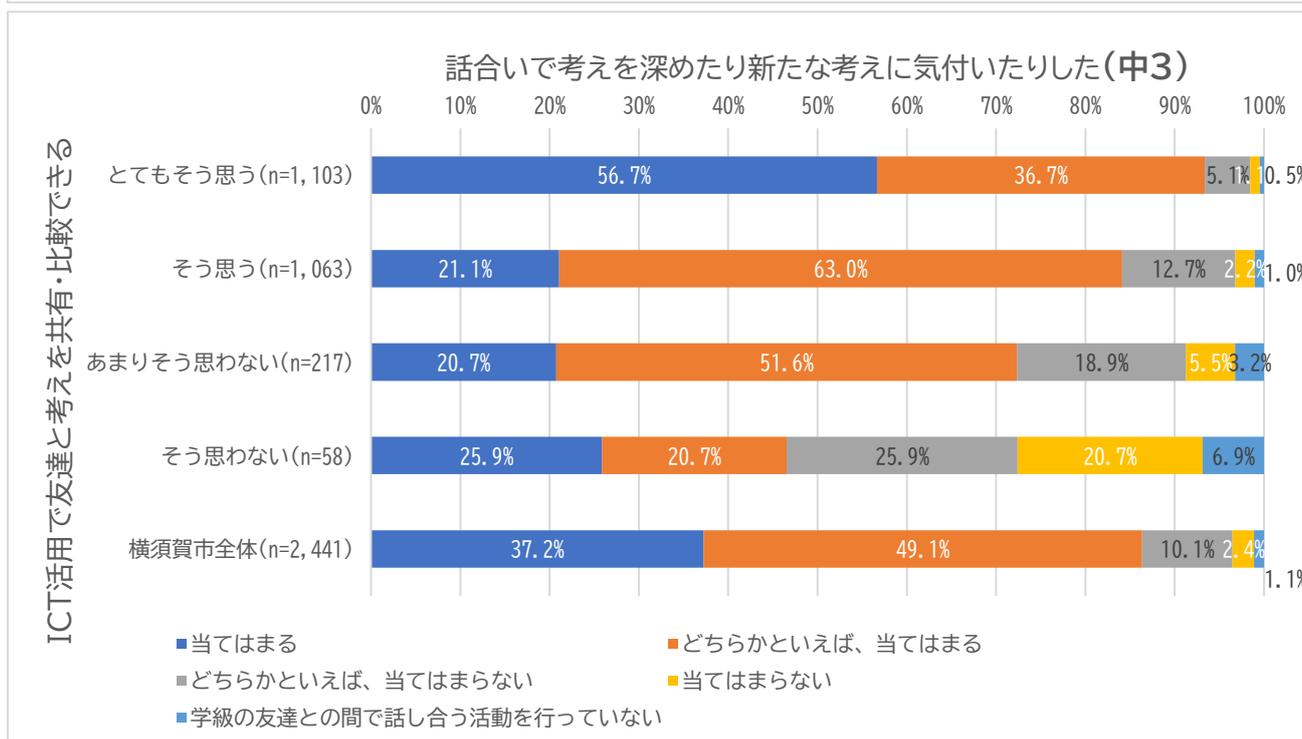
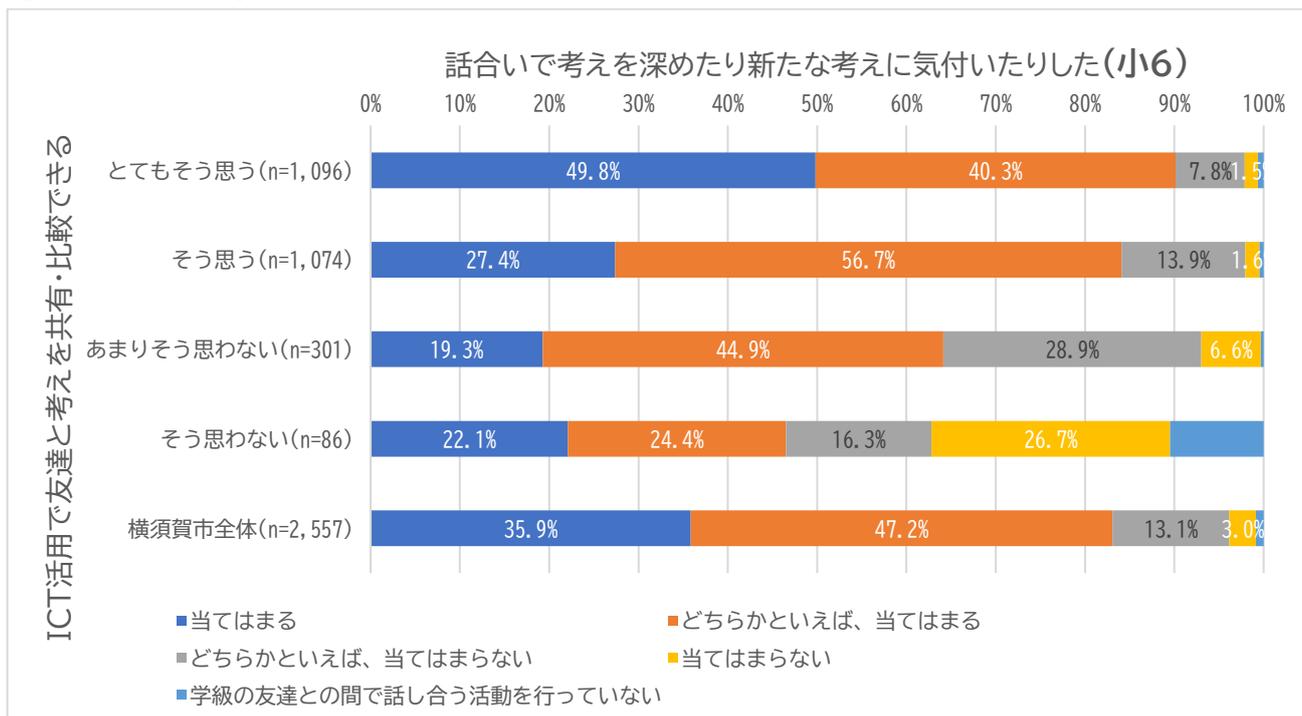
④[ICT活用で考えや意見を分かりやすく伝えられる]×[課題の解決に向けて自分から取り組んだ]

【横須賀市の結果】



⑤[ICT活用で友達と考えを共有・比較できる]×[話合いで考えを深めたり新たな考えに気付いたりした]

【横須賀市の結果】



分析

○小学校、中学校とも、週1回以上ICT機器を活用している児童生徒の方が、平均正答率が高い傾向が見られるが、「ほぼ毎日」「週3回以上」「週1回以上」活用している児童生徒の、平均正答率はあまり変わらない。小学校より中学校の方が、よりその傾向が見られる。

○主体的・対話的で深い学びに取り組んでいる児童生徒ほど、ICT機器の効力感に関して肯定的に回答している。

3. 今後の取組

クロス集計の結果から、「主体的・対話的で深い学び」に取り組んでいると自覚している児童生徒の方が、平均正答率が高い傾向が見られた。各学校においては、自分たちで課題を設定し、仲間と試行錯誤しながら解決しようとするような、探究的で協働的な学習活動を計画的に設定する等の工夫を心がけるとともに、グループワークや話し合い活動をして終わりではなく、活動を通してわかったことや考えたこと等をきちんと言語化させることが重要である。

また、「課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいる」と自覚することが、自己肯定感につながる可能性がある。授業を通して、子どもたちどうしで互いのよさを認め合う場面を設定したり、先生が児童生徒一人一人のよさを見取って認めたり、成長過程を見取って評価（言葉かけや、ノートへのコメント等）したりするなど、「自分にはよいところがある」と自覚する機会や経験を大切にしていく必要性など、教育課程研究会や校内研修等で指導、助言し、横須賀市学力向上推進プランに記載している具体的な取組をさらに推進していく。

ICT 機器の活用においては、週 1 回以上活用する児童生徒の方が、平均正答率が高く、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいる傾向が見られた。今後は、さらに、効果的な活用や個に応じた指導等への活用の充実を図り、探究的で協働的な学びの実現に向けて指導、助言を行っていく。

全国学力・学習状況調査 学校質問紙から捉えた本市の課題

全国学力・学習状況調査 小学校 学校質問紙 質問（13）

児童の姿や地域の現状等に関する調査や各種データなどに基づき、
教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCA
サイクルを確立していますか

『1.よくしている』の割合

全国

40%

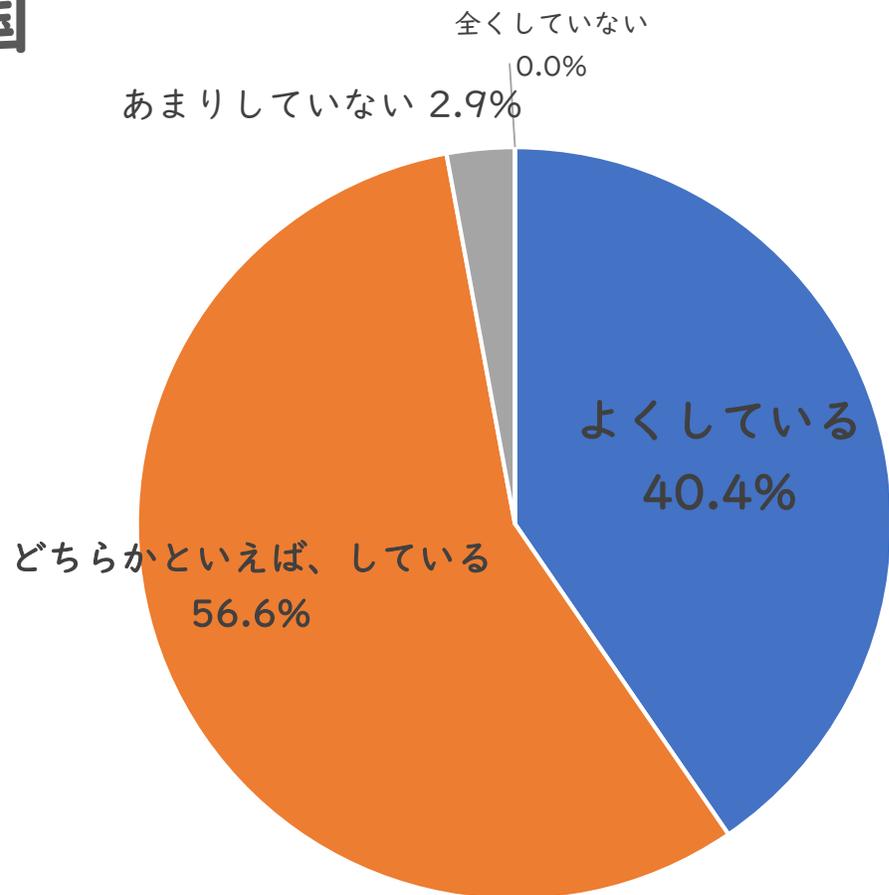
横須賀市

8%

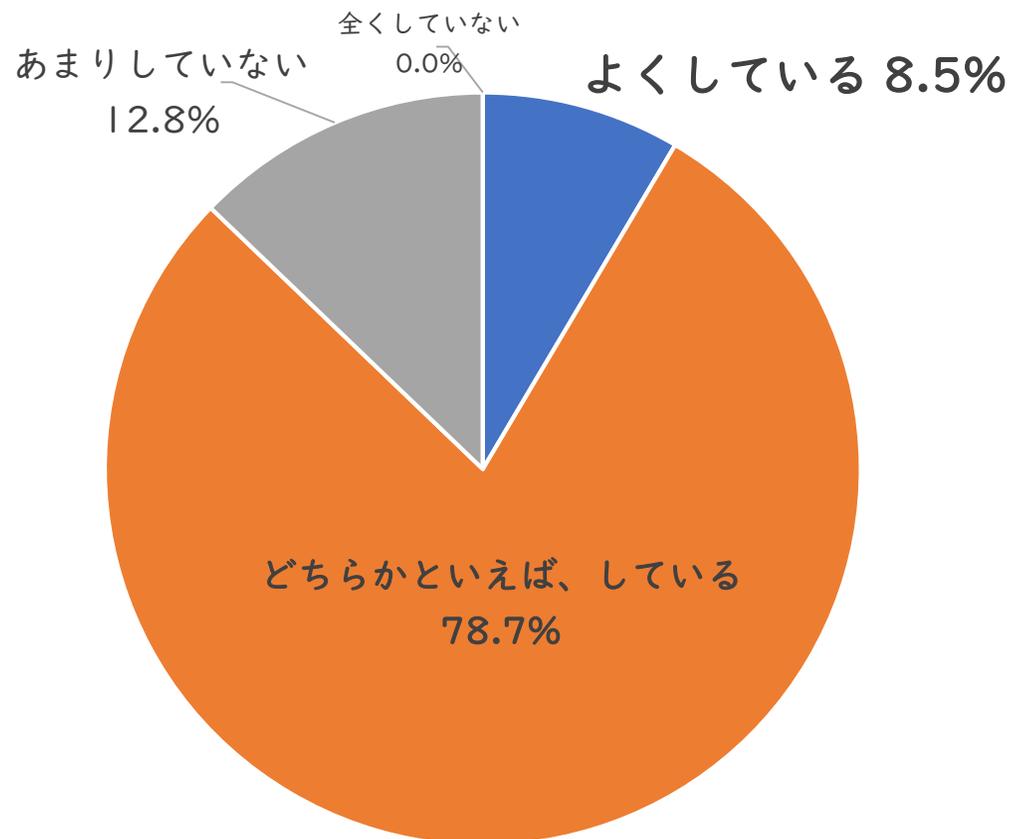
全国学力・学習状況調査 小学校 学校質問紙 質問（13）

生徒の姿や地域の現状等に関する調査や各種データなどに基づき、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルを確立していますか

全国



横須賀市



全国学力・学習状況調査 中学校 学校質問紙 質問（13）

生徒の姿や地域の現状等に関する調査や各種データなどに基づき、
教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCA
サイクルを確立していますか

『1.よくしている』の割合

全国

40%

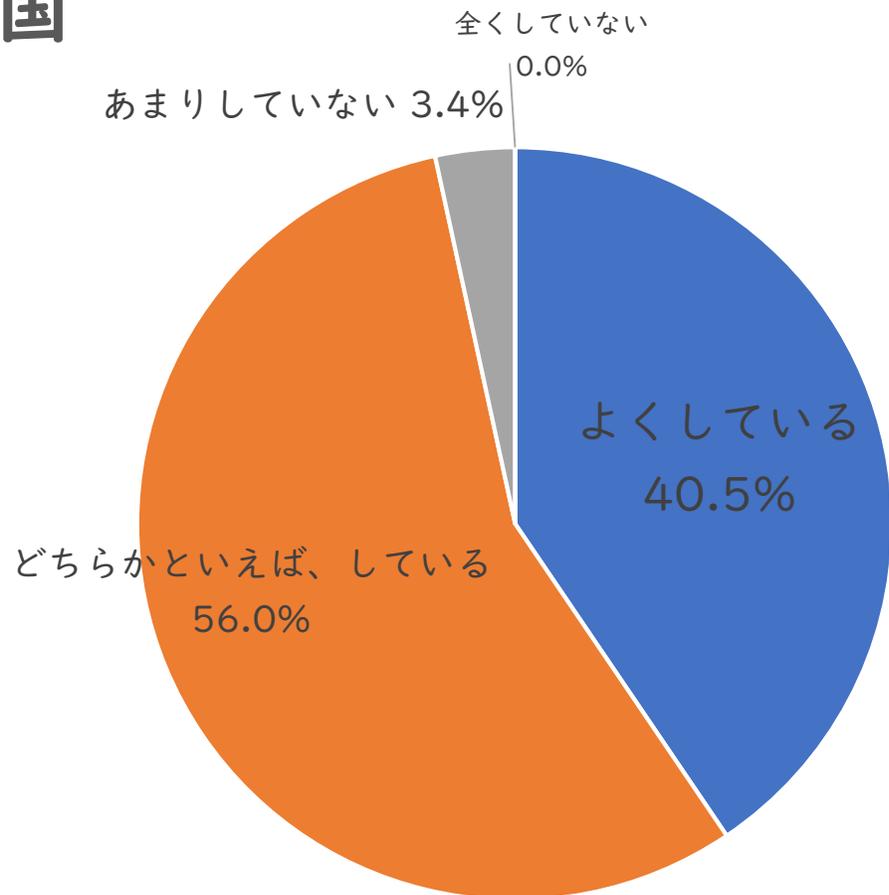
横須賀市

30%

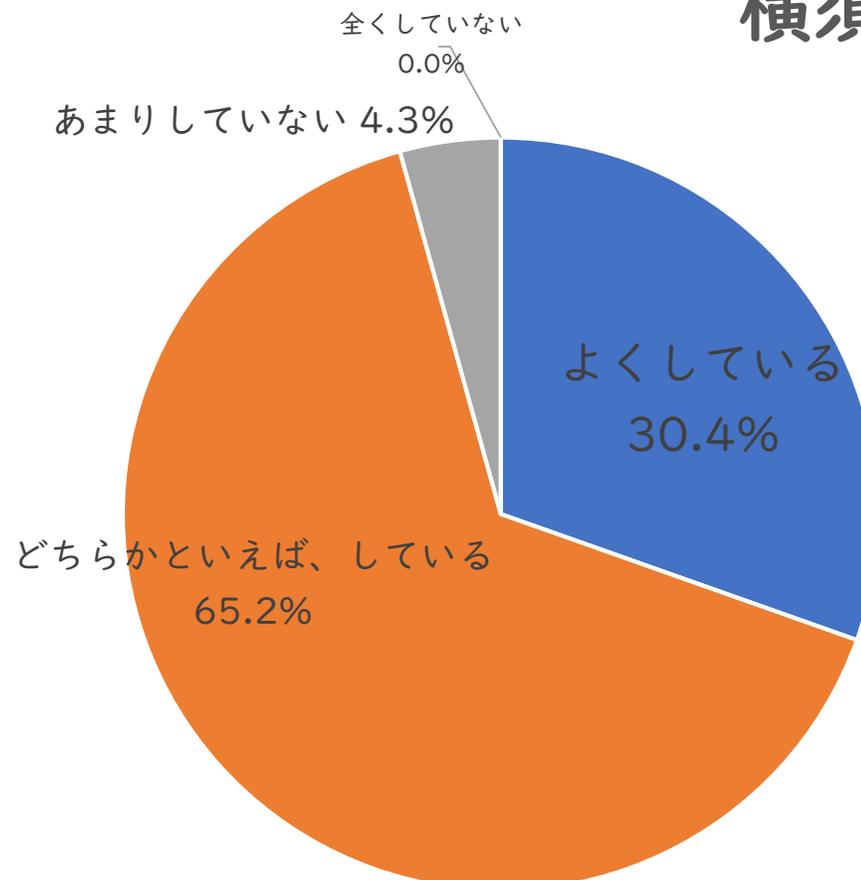
全国学力・学習状況調査 中学校 学校質問紙 質問（13）

生徒の姿や地域の現状等に関する調査や各種データなどに基づき、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルを確立していますか

全国



横須賀市



全国学力・学習状況調査 小学校 学校質問紙 質問（13）

児童の姿や地域の現状等に関する調査や各種データなどに基づき、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルを確立していますか

『1.よくしている』の割合

	全国平均	横須賀市小学校
R3	31%	2%
R4	29%	13%
R5	39%	17%
R6	40%	8%

PDCAサイクルが確立できていると回答した学校長のインタビュー



校内
研究



行事



教育
課程



学校教育
目標



授業



生徒
指導



学力
向上

PDCAサイクルが確立できていると回答した学校長のインタビュー

